

# 明治期の横浜における外国人スポーツ・ク ラブの活動と日本のスポーツ

渡 辺 融\*

## The Influence of Yokohama Foreigners' Sport Clubs in the Meiji Era on the Development of Western Sports in Japan

by

TOHRU WATANABE\*

### Abstract

**Purposes.** This study was intended to investigate the actual situations and the transitions of the Yokohama Foreigners' Sport Clubs in the Meiji era (1868-1912) and to examine their influences on the development of western sports in Japan through various games and competitions held between them and Japanese sportmen.

**Materials.** The historical materials used for this study were collected from foreign newspapers then published in Yokohama, reminiscences of foreign residents in this period, Japanese newspapers, periodicals, local histories, annals of colleges and universities, and other related resources.

**Results.** (1) In Yokohama, soon after the establishment of the Yokohama Foreign Settlement in 1859 (about a decade ago of the end of the Yedo), the foreign residents, consisted mainly of the Anglo-Saxon origin, had played various types of sport. As shown in Table 1 (see page 8), there existed many foreigners' sport clubs in the Meiji era. Followings are the names of clubs and sports:

| Names of Clubs  | Sports  |
|---|---|
| Yokohama Cricket and Athletic Club<br>(Y.C. & A.C.)#        | Cricket, Athletic Sport, Rugby, Soccer,<br>Baseball, Lawn Tennis, Hockey, Cycling |
| Yokohama Amateur Rowing Club<br>(Y.A.R.C.)                  | Rowing, Swimming, Diving, Water Polo  |
| Yokohama Rifle Association }<br>Swiss Rifle Club }          | Shooting  |
| Yokohama Skating Club                                       | Skating   |
| Yokohama Sailing Club (renamed to<br>Yokohama Yacht Club) } | Sailing, Yachting, Swimming   |
| Mosquito Yacht Club   |   |
| Nippon Bicycle Club   | Cycling   |
| Ladys' Lawn Tennis and Croquet Club                         | Croquet, Lawn Tennis  |
| Ladys' Hockey Club  | Hockey  |
| N.R.C. Golf Club  | Golf  |

\* 東京大学教養学部体育研究室 (Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo)

Yokohama Race Club }  
 Yokohama Race Association } Racing  
 (These two were merged into Yokohama  
 Jockey Club and later succeeded by  
 Nippon Race Club.)

#The Y. C. & A. C. was established in 1884 by the merger of Yokohama Amateur Athletic Association, Yokohama Baseball Club, Yokohama Football Club, and Yokohama Cricket Club.

Among those listed above, except those racing clubs which introduced European style of horse race to Japan, Y. C. & A. C. and Y. A. R. C. were the largest in their organizations and the most long-existed in their continuity.

(2) So far, it has generally been admitted that the earliest introducers of western sports to Japan were foreign teachers who were hired in Japanese schools and persons who had returned from their study abroad in this period but not the foreigners' clubs. However, Japanese students who were introduced to these western sports by those persons soon became to take part in games and meetings with and/or against those foreigners' sport clubs. So far as facts show, such sport intercourses are summarized as follows:

| Sports               | Period of Intercourse                   |
|----------------------|---|
| Shooting             | Early in the Meiji to Meiji 15 (1882)   |
| Rowing               | From Meiji 18 (1885) to Meiji 30 (1897) |
| Athletic Sport       | From Meiji 18 (1885) to Meiji 23 (1870) |
| Swimming             | From Meiji 31 (1898) to Meiji 32 (1899) |
| Baseball             | From Meiji 29 (1896)                    |
| Cycling              | From Meiji 30 (1897) to Meiji 36 (1903) |
| Rugby Football       | From Meiji 34 (1901)                    |
| Association Football | From Meiji 37 (1904)                    |
| Hockey               | From Meiji 40 (1907)                    |

These intercourses seemed to be especially effective in rowing, athletic sport, baseball, rugby, soccer, and hockey with respect to understanding, enhancement of skills and tactics, and popularization of these sports.

**Conclusion.** Considering that the later development of sports in Japan had progressed with an impact of students' intramural and extramural sports, and yet that those sports listed above had become a powerful core of their sport activities, it might be concluded that the Yokohama Foreigners' Sport Clubs had given a great amount of influence on the development of sports in Japan as its one of external factors.

An interesting problem remained to be solved in this study is the reason why cricket has not become one of the major sports among Japanese people even though it was introduced to several Japanese schools by the foreign teachers in comparatively early days and yet played as a major sport of the most active foreigners' club, the Y. C. & A. C.

## 目 次

ツ

- (1) 日本人とのスポーツ交流の概観
- (2) スポーツ交流の影響

はじめに

### I. 幕末から明治初年の横浜居留地におけるスポーツ

む す び

- (1) 居留地における運動娯楽施設問題
- (2) 居留地初期のスポーツ活動

### II. 明治期の横浜外国人スポーツ・クラブの実態

- (1) 外国人スポーツ・クラブの名称と存在時期
- (2) 外国人スポーツ・クラブの活動
- (3) 外国人スポーツ・クラブの規模と運営

### III. 横浜外国人スポーツ・クラブと日本のスポー

はじめに

現在日本で行なわれているスポーツを起源別に分類して、近代以前の日本の伝統社会に起源をもつ「在来スポーツ」と、近代になって欧米から日本に伝来した「欧米スポーツ」とするわけ方が一般に行なわれている。近代日本におけるスポーツの展開を見ると、後者が前者を圧倒しており、巨

視的に見れば、近代日本におけるスポーツの発達＝欧米スポーツの伝来→発達の過程と言えるであろう。

欧米スポーツの日本への伝来は、明治期の近代学校や軍隊がその舞台であり、担い手は当時盛んに雇傭されていた外国人教師達や、海外留学帰りの日本人であったとされている。したがって、欧米スポーツの伝来は多種目にわたり、且つそのような機関が存在した日本各地で多発的に行なわれたと言えよう。実際このような伝来の事例は、いま枚挙にいとまがないほどである。(註1)

しかし、スポーツの伝来が単なる伝来に留まらず、更に日本人の間で消化、普及されるには、またそれなりの条件が必要であろう。個人のレベルでいえば、スポーツをする習慣の容認、形成とか、経済的、時間的な余裕の問題があり、社会的なレベルでは、スポーツの意義づけ、奨励、その制度化、それに施設、用具、指導者を含めた場の保証、スポーツの集団の組織といったようなスポーツをする環境の成立という裏付けがなければならない。学校とか軍隊といった近代的な組織に、まずスポーツが行なわれたのは、このような条件が比較的整えられていたからであろう。

一方、日本におけるスポーツの普及、発達の外的な条件という観点から見ると、幕末、或は明治初年から日本各地の開港、開市場地に存在した外国人居留地における外国人のスポーツ活動は、彼らが、意識するとせざるとにかかわらず、彼らのスポーツ技術の水準が高いと低いとにかかわらず、欧米スポーツに全くの初心者であった日本人にとっては、当初絶好のモデルとなり、稽古台となったであろうことは想像に難くない。

いま、日本のスポーツの歴史に関する文献をひらいて見ると、幾つかの種目においては、横浜外人某の指導を受けたとか、横浜外人チームと試合を行なったとかいう記事があり、日本における欧米スポーツの発達に対する当時の居留外人の貢献がうかがわれる。しかし、視点を日本人の側におく限り、これら外人達の登場は脈絡のない散発的なものであるに過ぎない。彼らがいかにして日本という土地でスポーツをはじめ、組織し、スポーツで日本人と接するに至ったか、また彼らの存在を

日本におけるスポーツ発達のための好環境の一つと考えるならば、どのようなスポーツがそのような条件を備えていたかという問題を解明することはできない。すなわち、日本が欧米のスポーツを受容する際の客観的な条件—どんなスポーツが日本に伝わる可能性をもっていたか—を把握することができず、ひいては、日本人はその中から特に何を選択したかという問題をも考えることができないのである。

このような点から、明治期の日本で最大の居留地、開港場であった横浜における外人のスポーツ活動の実態とその推移をみ、その日本のスポーツへの影響を考えることは、日本におけるスポーツの発達をきわめてゆく上では無意味ではないと考えるのである。

本研究においては上記の目的を達するため、次の二つの点を具体的に追究してゆこうとするものである。

1. 上記外人のスポーツ活動は、種目別に幾つかのクラブ組織に統轄されていたので、これらのスポーツ・クラブの実態と推移とを文献から明らかにすること。
2. これらのクラブが、それぞれの種目で競技会や試合などの手段で、いかに日本人とスポーツ交流を行なったか、またこのような交流が日本のスポーツの発達の中で、どのように位置づけられるかを考察すること。

従来、明治期の居留地外人のスポーツ活動の意義に論及した文献として、木下秀明著「スポーツの近代日本史」がある。そこでは、まず居留地が欧米スポーツの伝来の経路となった種目として、競馬、撞球などがあげられている。次に普及・発達段階の問題として、舶来のスポーツを一度覚えた日本の学生にとって、外人スポーツ・クラブとの試合が、国際舞台に進出する前段階の、国内における国際試合として、いわば試金石的な役割を果たしている。特に第一高等学校と横浜外人の明治29年の野球試合を例にとり、この時の一高の勝利は、一高の側にとって戦争の勝利と同様の国際的事件であり、また世間一般の野球に対する関

心をたかめるのに力があつたとしている。<sup>1)</sup>

また筆者は、嘗て「F・W・ストレンジ考」において、ストレンジの帝大におけるスポーツの伝来の事業に対し、横浜の外人スポーツ・クラブが担った役割に注目して、それが彼の事業の成功の強力な背景となっていることを指摘した。<sup>2)</sup>

また、横浜外人スポーツ活動を実証的に扱った文献として、神奈川県教育委員会編「神奈川県体育史」がある。巻初の「体育・スポーツの概観」の項で、居留地外人のスポーツ活動が、日本における欧米スポーツの「ことはじめ」的な存在であったとして、競馬、陸上競技、野球、ボート、フットボール、テニス、スケート、射撃、ヨットなどの種目をあげ、また幾つかの種目では国際試合においても「ことはじめ」となったとしている。<sup>3)</sup> 外国人側の新聞、回顧録、記録などの史料をも典拠として詳細に記述されている点、注目されるべき文献である。

次に本研究で用いた外国人側の史料について触れておきたい。まず外人スポーツ・クラブの実態と推移を見るうえで、最も多くの基本的な史料を得られたのは、明治3年以来横浜で発行されていたイギリス人系の新聞 Japan Weekly Mail (以下 J・W・M と略す) の記事からであった。<sup>(注2)</sup> イギリス、アメリカ系居留民が中心であったと思われるこれらのスポーツ・クラブの活動に関して、この新聞は特に関心が高かったらしく、各クラブの年度総会の行事報告、会計報告、議事の要約、試合や競技会の予告、記録、詳報まで掲載している。勿論、部分的には脱漏もあるにはあるが、最も有力な史料であった。

また個々の外人スポーツ・クラブの歴史を扱った文献として、

1. History of the Yokohama Country and Athletic Club<sup>(注3)</sup>
2. Kobe Regatta and Athletic Club 1870~1970, The 1st Hundred Years<sup>4)</sup>
3. 神戸ゴルフ倶楽部史<sup>5)</sup>
4. 日本ゴルフ史<sup>6)</sup>

がある。2, 3, 4, は直接本研究の課題とは関係はないが、在日外人スポーツ・クラブや初期居留地の内情を理解するためには貴重であった。

回顧録の類の史料としては、幕末から明治初期にかけて在日したイギリス人ジャーナリスト J. R. ブラック (Black) の “Young Japan” は、初期居留地のスポーツの重要な史料であり、これと並んで、J・W・Mに掲載されていたイギリス人 J・P・モリソン (Mollison) のものも本人がクラブ関係者であるだけに有力な史料であった。〔Iの(注2)を参照されたい〕

なお、日本側の史料としては、日本の新聞、雑誌、地方史、学校史、スポーツ史、運動部史などによったが、これらについては論文末の文献表を参照されたい。

### 引用文献

- 1) 木下秀明：スポーツの近代日本史，1970，杏林書院，8～11頁および122～126頁
- 2) 拙著：F・W・ストレンジ考，1973，体育学紀要第7号，東京大学教養学部体育科，7～22頁
- 3) 神奈川県教育委員会編：神奈川県体育史，1973，1～11頁
- 4) Williams, Harold S. : Kobe Regatta and Athletic Club 1870~1970 The first Hundred Years, 1970, Kobe Regatta and Athletic Club
- 5) 三村隆敏編：神戸ゴルフ倶楽部史，1965，神戸ゴルフ倶楽部
- 6) 西村貫一：日本ゴルフ史，1930，文友堂（神戸ゴルフ・クラブ，横屋ゴルフ・アソシエーション，鳴尾ゴルフ・アソシエーションの歴史，史料が収められている）

### 注

(注1) この点に関しては、木村毅著「日本スポーツ文化史」や、手塚竜磨著「英学史の周辺」中の「日本に近代スポーツを移植した人たち」木下秀明著「スポーツ紹介に寄与した人たち」（体育の科学第18巻1号）などを参照されたい。

(注2) Japan Weekly Mail の初代の編集長はイギリス人 W・G・ハウエル (Howell) で、日本びいきの F・ブリンクリー (Brinkley) が主筆となったのは1881年1月である。この新聞は、彼の死後1917年から休刊し、19年4月日本人の英字紙 Japan Times と合併し、Japan Times and Mail となった。詳細は蛸原八郎著「日本欧字新聞発達史」や上掲「英学史の周辺」中の「親日英人ブリンクリー」などを参照されたい。本研究の史料として用いた J・W・M は国立国会図書館および東京大学中央図書館所蔵のもので1873年7月～1912年までのものである。

(注3) この文献は、現在も同クラブに所蔵されている。タイプ用紙シングル・スペースで11ページほど

の小品であり、公刊されていない。現在のところ著者、成立年代不明である。内容は1868年の横浜クリケット・クラブの設立から、1912年のY. C. & A. C. の改組をへて、1930年代までにわたっている。初期の部分は後述のJ・P・モリソンの回顧録に依拠している。

## I 幕末から明治初年の横浜居留地におけるスポーツ

### (1) 居留地における運動娯楽施設問題

スポーツ活動に不可欠の条件として施設の問題がある。殊に活動が恒常的且つ組織的になれば、それだけ必要となってくる。横浜居留地の場合には、早くも旧幕時代から、運動娯楽施設設置の要求が、本国の生活習慣を持続しようとする英米系居留民の間から、居留民の衛生状態を運動や娯楽によって改良するためとして、同国公使や領事を通じて出されている。すなわち、文久2年11月21日(1863年1月8日)アメリカ領事プラインより、幕府に対し、乗馬遊歩道路、競馬場、球戯場設置の要求があり、<sup>1)</sup>更に元治元年10月29日(1864年11月21日)イギリス公使オールコックより、ミシシッピー湾(本牧岬西側の入江)周辺の乗馬遊歩道路の建設、競馬場ならびに調練場の建設を含む要求が出されている。<sup>2)</sup>このうち、道路の方はオールコックの要求以前に着工され、同11月末には一部が落成し、オールコックは実地踏査の上、謝意を表する書簡を送っている。<sup>3)</sup>

これらの要求は、元治元年11月21日(1864年12月19日)に調印された横浜居留地覚書の第1、11条に盛り込まれている。少し長くなるが、この条文を掲げてみる。第1条は「周回日本里程18町(英法1里)にして既に方位は示し置きたる堀割の向なる地所を各国人の調練場且当地居留の外国人競馬の為に永々免し給はん事右地所は当今沼地なるか故日本政府の失費にて埋立らるへし、且此地所は雙方の調練場なるが故此地租は払ふ事なしと雖も競馬の為に設くる外面周囲の地の地租は追て取極め払ふへし」となっている。居留地背後の沼地を埋立て競馬場、調練場を造成するということが、調練場の方は、日本人も使用するから地租を払う必要はないが、競馬場の方は外人の専用であるから追て地租を定める、またその造成

費は土地所有者である日本政府の負担であるという内容である。第11条は、「当今掛念の場所も有之に付日本政府にて外国人の東海道出行可成丈け省かん為に日本政府にて長さ45マイル、幅20フィートに減せざる善き街道を外国人運動の為に根岸村を通し円転し既に差出したる図の通り建築方メジョル、レーの差図にて既に取り掛りたる工作に従つて営むこと並に右街道も日本政府の費用にて賄ふへし」となっている。<sup>4)</sup>これは当時幕府が最もおそれていた外国人の東海道方面への遊歩による、日本人との摩擦を予防するための対策の一つだったものであり、遊歩道路として、慶応3年に完成するのである。

第1条の競馬場及び調練場の方は、慶応2年に彼我の話し合いで競馬場建設地を根岸に移すことになり、同年中に着工した。そこで同年11月23日(1866年12月29日)の横浜居留地改造及び競馬場墓地等約書によって、この第1条を廃止し、かわって「競馬場操練場及び遊歩場の為大岡川の後方に在る沼地を埋立んとする事に関する右約書中第一ヶ条に掲ぐる取極は此度全く廃止せり、且是に替へ根岸の湾を見下す原野に於て今既に落成せし競馬場を用い且旧港崎町の地所を外国並日本彼我にて用ふへき公けの遊園となし、是を拓め平坦になし樹木を植付る事を日本政府にて契約せり、但右港崎町を大岡川の南方に引移すへし日本政府右遊園の租を取立さると雖も右地所を安全に保ち且取締方の出費を払ふへき法を神奈川奉行及外国コンシュル等にて設くへし」となった。<sup>5)</sup>つまり公園の造営費は日本政府がもち、日本人も利用するから地租もいらぬが、維持費は、奉行と外国側の相談で捻出法を考えようということである。またこの時の第10条で、新たに開く山手居留地にも日本側の出費で公園を設けることを取り極めている。

第1条の公園は、後の横浜公園である。根岸の競馬場の方は早々に竣工したが、公園の方は幕末の動乱の為実行が大はばにおくれて、明治7年に着工され、同9年に漸く完成する。<sup>6)</sup>この他に元治元年3月には、イギリス軍の訓練のために根岸村に角打場(ライフル銃試発場)が設けられ、これは無税でイギリス側に貸与されている。<sup>7)</sup>

以上に挙げた諸施設は、外国側の要求により、

日本政府の負担で建設されたものであったが、居留地におけるスポーツは、これらの施設を主な拠点として開始されてくる。

根岸競馬場は、慶応3（1867）年から外人達がイギリス風の競馬会を春秋催し、日本における洋式競馬の発祥地となり、横浜公園敷地内には、公園建設に先立って明治5（1872）年から、イギリス人の横浜クリケット・クラブがクリケット場をつくり、芝生を植え、柵を廻らし、クラブ・ハウスを建てて使用しており、<sup>(注1)</sup>明治期を通じて、外人のスポーツの中心地となる。また山手公園は、明治4（1871）年から外人側に公園地として貸与されたが、経済的事情で維持が困難となり、同11（1878）年日本側に一旦返還され、更めて婦人弄鞠会（レディス・ローンテニス・アンド・クロッカー・クラブ）にテニス・コートとして貸与されている。<sup>8)</sup>射撃場は、射撃クラブの競技場として、また、一部は後に陸上競技場として用いられ、明治6（1873）年、横浜アマチュア・アスレチック・アソシエーションに貸与されている。

## (2) 居留地初期のスポーツ活動

次に、初期の居留地において、スポーツ活動が如何に展開したかということに目を転ずる。先に述べたように、この時期に関する史料は、主として当時の居留民の回顧録に頼っている。そのうち最も有力なものは、既述のJ・R・ブラック（Black 1827~1880）の“*Young Japan*”である。

ブラックの著書から初期の居留地のスポーツ、娯楽の記事をとり上げ、年代順に整理してみると、居留地が開設（1859年7月1日）されて2、3年後の1861、2（文久元、2）年頃のこととして、初期の居留民の娯楽は居留地付近（10里以内に制限されていた）の山野への遠足であり、これには常に護身用のピストルを携行せねばならなかった。また居留地内では、1862年に新しい埋立地に周田3/4マイルの競馬場ができ、2日間の競馬が行なわれた。<sup>9)</sup>1865（慶応元）年には横浜ライフル・アソシエーションが設立された。スイス国民の射撃クラブである「ティール・ナショナル」はこれ以前からあり、両者とも数年間射撃競技会を催していた。競馬、競漕、ヨットレース、運動

競技（陸上競技であろう一筆者注）なども順々に行なわれてゆき、このような点では、横浜は東洋の居留地として最も恵まれていた。<sup>10)</sup>

1866（慶応2）年7月4日、新しい根岸競馬場の建設に伴って、横浜競馬クラブが設立された。<sup>11)</sup>新しい埋立地は新しい建物が立つまで、クリケットなどのスポーツに利用された。<sup>12)</sup>1871年には神戸の外人達が来浜し、初めて、ボートレースと陸上競技で両港競技（インターポート競技会）が行なわれたことなどが述べられている。<sup>13)</sup>

茶の貿易商人であったイギリス人J・P・モリソン（Mollison）は、<sup>(注2)</sup>ブラックよりおそく1868（明治元）年早々に、2年間の上海滞在を経て横浜に到着した。彼はかなりのスポーツマンで、その回顧録にはしばしばスポーツのことが出て来る。1903（明治36）年、横浜文学協会（Yokohama Literary Society）で彼が行なった“*Old days and old scenes*”という回顧談が、J・W・Mに掲載されている。<sup>14)</sup>これによると、根岸競馬場ができるまでは、射撃場で競馬が行なわれていた。また射撃場は、陸上競技場としても使われ、1871年のインターポート・マッチの時にはここで陸上競技大会が開かれ、自分は三段跳に出場し優勝した。ボート・クラブ（横浜アマチュア・ローイング・クラブ）は、この年（1871）設立され、その功労者は、アメリカ人ジョージ・ハミルトン（George Hamilton）である。クリケット・クラブは1868年に自分と同業者のアーネスト・プライス（Ernest Price）というイギリス人とが設立し、現在のクリケット・グラウンドから数百ヤードの所にあった新しい埋立地の60ヤード四方の土地を整地し、芝生を植え付けて、クリケット場としたと述べている。

競馬が初期居留地において、娯楽の筆頭を占めていたことは、上記のブラック以外でもうかがわれる。当時イギリス公使館員であったアーネスト・サトウも、横浜の外人社会について、「誰もが一、二頭の馬を買い、頻繁な宴会のごちそうにシャンペンを景気よく抜いたものだ、春秋二期に競馬が催され、時には『本物』の競走馬も出場した。」<sup>15)</sup>と書いており、その他にも1902年頃の一老

居留民の回顧談として、「1860年代の横浜では皆ポニーを持ち、レースに出場した。」というのが見える。<sup>16)</sup> イラストレーテッド・ロンドン・ニュースに絵入りで紹介された、日本人が出場した競馬は1865年春のものであり、<sup>17)</sup> このようなことから見ても、初期においては競馬は最も組織的且つ盛大なスポーツであったようである。

競馬以外のスポーツも、ボート、ヨット、陸上競技や射撃などがはじめは散発的に行なわれ、居留民の増加や、施設の整備の進行につれ漸次組織化、活発化したと思われる。モリソンの叙述にてくる諸スポーツ・クラブが設立された明治初年が、横浜外人のスポーツ活動の本格的なスタートであったと言えるのではあるまいか。

またこの時期のスポーツ活動は、施設建設の交渉にイギリス、アメリカの公使や領事が出たり、種目にイギリス系のスポーツが多いことから見てもわかるように、イギリス、アメリカ系の居留民が中心であったであろうと思われる。

#### 引用文献

- 1) 横浜競馬場遊楽地設置一件 文久2年11月米公使ヨリ閣老ニ東海道ヲ変更スルヨリハ横浜山手ニ於テ大一区ヲ開キ乗馬其外諸遊楽ヲ為スノ所ヲ設ルニ如カストノ来翰、統通信全覽 類聚地処門所収、横浜市編：横浜市史資料編3. 1964, 204~205頁
- 2) 同上一件 元治元年10月29日 英国公使ヨリ閣老ニ予テ開陳セシ競馬場其外四五件ノ條款ヲ挙ケ発帆前処置ヲ促スノ来翰、同上書206~208頁
- 3) 同上一件 元治元年11月27日 英国公使ヨリ閣老ニ横浜馬車道ノ落成ヲ喜ヒ競馬場モ速ニ成功スヘキヲ証シ本国政府ニ報告スヘシトノ来翰、同上書210頁
- 4) 横浜居留地覚書 元治元年11月21日(1864.12.19) 調印、神奈川県企画調査部県史編纂室編：神奈川県史資料編15近現代5, 1973, 304~314頁
- 5) 横浜居留地改造及競馬場墓地等約書 慶応2年11月23日(1866.12.29) 調印、同上書, 346~358頁
- 6) 横浜市編：横浜市史3巻下, 1963, 812頁
- 7) 同上書 790頁
- 8) 横浜山手式百三拾番公園地賃渡証 神奈川県史資料編15近現代5, 前掲, 724~726頁
- 9) Black, J. R.: Young Japan, 1880, London Trubner & Co., 邦訳ねず、まさし、小池晴子, 1970, 平凡社, 第1巻77頁
- 10) 同上書 第2巻64頁
- 11) 同上書 第2巻109頁
- 12) 同上書 第2巻90頁
- 13) 同上書 第3巻159~160頁

- 14) J. W. M.: May 2nd 1903
- 15) Satow, Ernest M.: A Diplomat in Japan, 1921, London, 邦訳坂田精一：一外交官の見た明治維新, 1966, 岩波文庫, 上巻26~27頁
- 16) Yokohama in the Sixties, J. W. M.: Jan. 4th 1902
- 17) 日本中央競馬会編：日本競馬史, 1966, 第1巻510頁

#### 注

(注1) 明治5年6月13日付 神奈川県より大蔵省へ上申書(前掲 神奈川県史資料編15 619頁所収)  
 横浜新埋立地公園中江クリケット 玉突場社中ニ而地坪二千二百坪之場所江芝植付之為メ別段入念之地平均芝植付共入費金五百七拾兩三分永百貳拾五文相懸右半高差出相成度旨英国代理公使ヨリ外務省へ申立候右者公園造営之義者官費之管兼而約定相成候場所江芝植付之義ニ付無余義次第故官費ニ相立候様同省ヨリ違有之候処芝植付方出来に付即今半高金貳百八拾五兩老分永百八拾七文五分請取度旨英国領事別紙勘定書を以申立候間右半高相渡候様可仕来否至急御差図相成度此段相伺候以上

壬申六月十三日

神奈川県参事

大江 卓

大蔵大輔 井上 馨殿

という伺いがあり、許可されている。なおクラブ・ハウスの建設は、これより少し後のようである。

(注2) 彼は、ロンドンで茶の鑑識人(Tea Taster)の訓練をうけた後、貿易会社に職を得て東洋に来た。その後茶の貿易商として独立し、Mollison & Fraser 商會を經營していたようである。彼の回顧録は、1903年のものと、1898年12月の Y. C. & A. C. の新クラブ・ハウスびらきの時との再度にわたって、J. W. M. に掲載されている。

## II 明治期の横浜外国人スポーツ・クラブの実態

(1) 外国人スポーツ・クラブの名称と存在期間  
 前章のような揺籃期を経て、明治初年に入ると、居留民社会には、競馬や射撃以外にも幾つかのスポーツ・クラブが誕生してくる。表1は、それらの中で史的に存在や実態が比較的是っきりしているものの名称と、存在していたと考えられる期間を示したものである。実線の部分は、その年に J. W. M. その他からそのクラブの存在を証明する史料を発見できたことを示し、点線の部分は、その年に関しては発見できなかったが、その後の年に再び史料があり、前後から考えて、そのクラブが確かに存在したであろうと推定できるこ

表 1 横浜外人スポーツ・クラブの存在状態

| クラブ名                        | 年     | 1868  | 9 | 70 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 1900 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 1 | 2  | 明治元   | 改称    |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |    |    |
|-----------------------------|-------|-------|---|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|---|----|-------|-------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----|----|
| Y. A. A. C.                 | }     | ----- |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |    | 合併    | ----- |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |    | 改称 |
| Y. B. B. C.                 |       | ----- |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |    | 合併    | ----- |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |    | 改称 |
| Y. C. C.                    |       | ----- |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |    | 合併    | ----- |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |    | 改称 |
| Y. F. B. C.                 |       | ----- |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |    | 合併    | ----- |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |    | 改称 |
| Y. A. R. C.                 | ----- |       |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   | 合併 | ----- |       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 改称 |    |
| Y. Rifle Assot.             | ----- |       |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   | 合併 | ----- |       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 改称 |    |
| S. S. T.                    | ----- |       |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   | 合併 | ----- |       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 改称 |    |
| Y. Skating C.               | ----- |       |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   | 合併 | ----- |       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 改称 |    |
| L. L. T. & C. C.            | ----- |       |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   | 合併 | ----- |       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 改称 |    |
| Y. Sailing C. → Y. Yacht C. | ----- |       |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   | 合併 | ----- |       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 改称 |    |
| Mosquito Yacht C.           | ----- |       |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   | 合併 | ----- |       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 改称 |    |
| Nippon Bicycle C.           | ----- |       |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   | 合併 | ----- |       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 改称 |    |
| N. R. C. Golf C.            | ----- |       |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   | 合併 | ----- |       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 改称 |    |
| L. Hockey C.                | ----- |       |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   | 合併 | ----- |       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 改称 |    |
| Y. Race C. } Y. Jockey C.   | ----- |       |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   | 合併 | ----- |       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 改称 |    |
| Y. Race A.                  | ----- |       |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   | 合併 | ----- |       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 改称 |    |
| Nippon Race C.              | ----- |       |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   | 合併 | ----- |       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 改称 |    |

とを示す。

次に表に則し、各クラブについて述べる。

Y. C. & A. C. (Yokohama Cricket and Athletic Club) は表に見るように、1884 (明治17) 年に四つのクラブが合併して設立されたものである。1912 (同45年) に組織、名称を変更して Yokohama Country and Athletic Club となり、今日に至るまで活動を続けてきている。<sup>(注1)</sup> このクラブは、その前身のクラブが行なっていた陸上競技、クリケット、フットボール(A式, ラ式)、野球のほか、1879年にはすでにローンテニスの用具を備え、恐らく1890年代末頃からホッケーをクラブのスポーツとして行なっており、<sup>1)</sup> また1895年秋期の陸上競技会では2マイルの自転車レースを行ない、<sup>2)</sup> 翌年自転車の走路をグラウンドの周囲に設けるなど、最も多種目にわたる活動を行なっていた。<sup>3)</sup>

Y. C. & A. C. の前身の4クラブのうち、最も古いと思われる Y. C. C. (Yokohama Cricket Club) は、先に述べたように1868年に設立され、72年には横浜公園敷地内に2,025坪を借り、クリケット場建設のため、整地、芝の植え付けを申し出て、許可を得、工事費570両余の半額を日本政府に負担させている。<sup>4)</sup> Y. A. A. (Yokohama Amateur Athletic Association) は1873年11月の第1回陸上競技大会の記事によると、「このアソシエーションは、昨年11月に競馬場で行なわれた陸上競技会が成功したのをきっかけに本年組織された……」<sup>5)</sup> となっているので、この年設立されたことは確かで、1871年のインターポート・マッチの時には未だなかった筈である。Y. B. B. C. (Yokohama Baseball Club) と Y. F. B. C. (Yokohama Football Club) は前二者ほど存在がはっきりしない。あまり有力な団体でなかったためか、総会記事は1882年4月15日の B. B. C. の分しか掲載されていない。両者とも専用運動場をもたず、Y. C. C. のものを借用していたため、Y. C. C. の方の報告書類に名が出てきたり、あるいは試合の記事によって存在が確かめられた。

Y. A. R. C. (Yokohama Amateur Rowing Club) は、モリソンの講演<sup>6)</sup> と、同クラブの1879年3月9日の年度総会報告が第8年報となってい

ることとから考えて、1871年に設立されたと考えてよいであろう。横浜市史稿によると、1866年にフランス波止場付近に艇庫が設けられたとされているが、<sup>7)</sup> これを利用した団体の実態はわからない。Y. A. R. C. は1880年12月からフランス波止場付近に、競船会小船置所(艇庫であろう)として283坪の土地特別貸与証券を交付されている。<sup>8)</sup> このクラブは、所謂漕艇のほか初期にはヨット、帆走も含んでいたようであるが、後にこの部門が独立する。また夏季には水泳、ダイビング、水球(1890年から)を、冬季には艇庫を利用してピンポンを行なっていたようである。

二つの射撃クラブは、ブラックによれば、競馬クラブと並んで最も古い団体である。Y. R. A. (Yokohama Rifle Association) は1865年に設立され、S. S. T. (Société Suisse de Tir 又は Swiss Rifle Club) はこれより以前の設立とされている。R. A. の方は、イギリス系でウインブルドン・クラブと関係をもち、S. T. の方はスイス系でスイス国民以外は会員資格がなかったようである。<sup>9)</sup> 1880年には、スイス領事から日本側に本牧の射撃場に玉見所の設置を申し入れている。1871年現在で横浜在住のスイス人は男21男児2女1計24人に過ぎないが、<sup>10)</sup> これだけの人数でクラブを組織しているのはさすがに射撃を国技とし、民兵組織の国柄を思わせるに充分である。両射撃クラブの競技会は1881~2年頃まで紙面ににぎわし、日本人の村田経芳が出場するなど、国際色豊かなところを示しているが、<sup>11)</sup> 1883年以降は全く姿を消してしまう。ずっと後になって、Yokohama Shooting Club (1903年)、Yokohama International Shooting Club (1911年) の記事が出てくるが、これらと前二者との関係はわからない。

Y. Skating C. (Yokohama Skating Club) の設立は1878年末である。<sup>12)</sup> これより前、1874年1月3日にY. A. A. A. がグラウンドの近辺にスケート・リンクの建設をすすめているという記事があり、また日本の新聞でも1876年に、根岸村立野で青木新兵衛が氷すべり場を作ったことや、<sup>13)</sup> 翌77年本牧牛込村で、アメリカ人メリマン他数人がスケートをしたこと<sup>14)</sup> などが報ぜられている。メリマンは後にスケーティング・クラブの委員と

なっている Merriman と同一人と思われるので、正式のクラブ発足前からスケートは行なわれていたようである。Y. Skating Club の記事は居留地撤廃の年1899年まであらわれてくるが、これ以後全く見られなくなる。

比較的小さく組織されたのは、ヨット、帆走クラブである。ヨットや帆走のレースそのものは、ブラックの目にもとまっているので早くから行なわれていたようであるが、Yokohama Sailing Club が設立されたのは1886年末である。Sailing Club の史料によるとこの時参加したクラブ員の多くはそれまでY. A. R. C. に属していたという。<sup>15)</sup>10年後の1896年には他のもう一つのヨット・クラブである M. Y. C. (Mosquito Yacht Club) が誕生し、翌年には Sailing Club が Y. Yacht. C. と改称する。後に触れるように、M. Y. C. も本来 Y. Sailing C. に属していた人々が分出独立して設立されたようであり、夏季はヨット以外に水泳も行なっている。<sup>16)</sup>

女性のクラブとして L. L. T. & C. C. (Ladys' Lawn Tennis and Croquet Club) がある。このクラブは、施設の項で述べたように、1878年7月1日付で、神奈川県から山手公園6933坪を年150ドルで借用する貸渡証を交付されている、一ただしこの証書の条文中でテニス、クロッカーに使用する面積は1500坪を超えないとされている<sup>17)</sup>—ので、随分早くからあった筈であるが、J. W. M. 紙面にでてくるのはずっとおそく、1890年以降であり、この間の消息は詳らかでない。Y. C. C. の史料では、1876年の総会報告にグラウンド使用のことで Lawn Tennis Club の名がでてくる。これが L. L. T. & C. C. であるかもしれないが、ウイングフィールド (Wingfield) が屋外テニスを考案したのが1874年、ウインブルドンのクロッカー・クラブが、オールイングランド・ローンテニス・アンド・クロッカー・クラブと改称され、競技会をはじめたのが1877年とされているから、<sup>18)</sup> 横浜へのローンテニスの伝播は非常に早かったわけである。女性のクラブは、この他に1902年以降の L. H. C. (Ladys' Hockey Club) がある。

1897(明治30)年には N. B. C. (Nippon Bicycle Club) が登場する。明治30年前後は丁度日本でも

自転車ブームだったのであるが、このクラブは日本の自転車クラブとの交流を盛んに行なっていたようである。このクラブに関する記事も、ブームが過ぎると J. W. M. 紙面から急に姿を消してしまう。

1906年には根岸競馬場の近傍にゴルフ・リンクを建設した N. R. C. Golf Club が設立されている。同年11月30日に18ホール、パー79のリンクを開く際には、周布神奈川県知事が始球式を行ない、<sup>19)</sup> 同時に彼はこのクラブの会長をつとめている。これより3年前に設立された日本最初のゴルフ・クラブである神戸ゴルフ倶楽部では、当初約200名の会員中に、数名の日本人が含まれているが、<sup>20)</sup> このクラブに日本人が入っていたかどうかはわからない。

最後に、最も早くから娯楽の王者であった競馬に関しては、ブラックによれば1862年の競馬の際に組織された委員会は、その後活動せず、射撃場等で開かれた競馬は主として軍人が組織していたという。そして1866年7月4日の Y. R. C. (Yokohama Race Club) の設立となり、翌年から春秋の根岸競馬を Y. R. C. が主催するのである。そもそもこのクラブの設立は、競馬場の地租年間1492ドル余の経費負担が動因であり、そのため、「外交官勤務者、すべての国の軍人、横浜と横浜連合、およびドイツ・クラブのメンバーが競馬クラブの中核を結成するために招かれた。」そして「非常に多数の者が登録したので、コースの建設は進められ、数ヶ月後に競馬場がクラブに引き渡された。」という。<sup>21)</sup> Y. Race C. は借地料の前納の義務を負い、その代り競馬、遊歩の目的に反しない限り、競馬場取扱規則を制定する権利を保持していた。<sup>22)</sup> Y. Race C. は1877年まで存続し、この間1876年に別の団体である Y. R. A. (Yokohama Race Association) が設立され、両者で別箇に春秋の競馬を開いていた。1878年にはこの両クラブが合併し Y. J. C. (Yokohama Jockey Club) となった。合併の理由は、せまい居留地で春秋2回計4回延12日(1回の会期は3日間が通例であった)の競馬開催は多すぎるということであるが、<sup>23)</sup> 溯って、Y. R. A. が設立された理由はわからない。Y. J. C. は規約によると日本人に

も会員資格を認めている。<sup>24)</sup> このクラブは経営的にうまく行かず、1880年には、N. R. C. (Nippon Race Club) が設立され、以後春秋の競馬を開催することになる。N. R. C. は1884年から競馬場の特別貸与証券を交付されている。<sup>25)</sup> 競馬においては、外人だけで開催していた段階では運営が苦しかったらしく、明治初年から7年まで地代の軽減を申し出て認められている。Y. J. C. の解散と共に競馬場を日本側に返納し、N. R. C. が引き継ぐことになる。<sup>26)</sup> この段階になると、馬種の改良とか、良馬の飼育を賞金によって一般に奨励するという大義名分で、日本の有力者の後援をうけ、「見るスポーツ」の方向に進んでゆく。競馬に関しては、この点で質的に他のスポーツ・クラブと異なるので、本稿ではこれ以上扱わないことにする。

表に掲げたスポーツ・クラブに関する概括は以上の通りである。その他に、射撃の項で述べた Y. Shooting C., Y. International Shooting C. や、1874、6年にカヌー・クラブ、1875年に解散の記事だけが見られる Yokohama Regatta Club などの名が挙げられるが、記事が少なく実態もよくわからないので表からは割愛した。

## (2) 外国人スポーツ・クラブの活動

次にこれらの諸クラブは、実際どのような活動を展開していたであろうか。J. W. M. のスポーツ記事から、1881年および1899年の横浜における外人のスポーツ行事を拾い出して表にしてみた。新聞記事からであるので、行事のすべてを網羅しているとは思えないけれども、大体の傾向を窺うことはできよう。この兩年をえらんだのは、比較的スポーツ記事が豊富であることと、1881年の方は日本人とのスポーツの交流があまりなく、Y. C. & A. C. 設立以前の初期的状態の代表として、99年の方は交流がはじまった中期以降の代表としての意味からである。

表をもとにして明治期横浜の外人スポーツ活動を見て行くと、まず第一に各スポーツともかなり厳密にシーズン制が守られていることが注目される。フットボール(後にはホッケーも)は11月末～3月、クリケット・野球は5月或は6月初めから11月、ボートは4～6月、10～11月、で、クラ

ブの大会は春と秋に1回ずつ、水泳は8、9月、ヨット・帆走は4月末～11月初旬、陸上競技は春と秋に1回ずつ、競馬会も春と秋に1回ずつ、スケートは気候にもよるが、概ね年末～2月下旬又は3月というようになりかなり整然としている。あまり季節に関係なさそうな自転車でも、競技会は春と秋の1回ずつを恒例のものとしていたようである。各クラブは種目によりシーズンのオープンとクローズを指定している、おそらくクラブ・ハウスとかその他の施設の運営と密接なつながりがあったのであろう。例えばクリケット、野球でいえば、日本では気候的に3月下旬から5月頃までがふさわしいと考えている。しかし、Y. C. & A. C. ではそうではなく、本国の習慣でもあろうが、4月、ある時には5月の上中旬までは芝生の状態が整わないということでシーズンインせず、5月、おそい時には6月の初旬に至ってはじめて開始している。

試合や競技会などの行事は大体週末(土曜日)に行なわれている。日曜日は行なわないのが習慣のようである。<sup>(注2)</sup> 種目によっては、特定のウィークデーを練習日にあてていたこともあったようであるが、概して試合、競技会が中心であった。

次に初期(81年)と中期(99年)以降との相違に注目して見たい。前者では、射撃がかなりの頻度で入っているが後者には見られない。逆に後者において前者にないものは自転車、ヨット・レースである。スケートは99年は記事の上では最後の年で翌年から見られなくなる。81年には、スケート・クラブはあった筈であるが記事にはあらわれていない。日本人との交流に関していえば、81年ではレガッタと射撃競技会において行なわれている。前者は日本海軍の軍艦のカッター・レースであり、後者は村田その他の将校が Y. R. A. や S. S. T. の射撃会に出場しているもので、いずれも軍人によるものである。99年では、自転車、水泳、野球であって、水泳、野球は対抗競技の形をとり、学生によって行なわれている。

次いで、これらの活動にもう少し立ち入って見たい。陸上競技会、ボートレース、競馬会は春・秋各1回が恒例であったことは、既に述べた。但し、前二者は時としてエントリーが少ないため流

表 2-1 Japan Weekly Mail の横浜外人スポーツ行事記事

| 掲載年月日      | 行事月日         | スポーツ行事 | 団体名         | 備考                                |
|------------|--------------|--------|-------------|-----------------------------------|
| 1880.11.27 | 11.27        | フットボール | Y. F. B. C. | オープニング・マッチ クリケット・グラウンド            |
| 12.11      | 12. 4        | "      | "           | ラ式                                |
| 1881. 5. 7 | 4.30         | クリケット  | Y. C. C.    | オープニング・マッチ                        |
| 14         | 5.9~11       | 競馬     | N. R. C.    | 春季大会                              |
| 21         | 5.20         | クリケット  | Y. C. C.    | クラブ内                              |
| "          | 5.14<br>5.16 | 競馬     |             |                                   |
| "          | 5.19         | 野球     | Y. B. B. C. | クラブ対海軍                            |
| 28         | 5.27         | "      | "           | 同上                                |
| "          | 5.24         | クリケット  | Y. C. C.    |                                   |
| "          | 5.21         | 射撃     | Y. Rifle A. |                                   |
| 6. 4       | 5.28         | クリケット  | Y. C. C.    |                                   |
| "          | "            | 射撃     | Y. Rifle A. |                                   |
| "          | 6. 2         | ボートレース | Y. A. R. C. | 海軍々艦カッターレースあり                     |
| 6.11       | 6. 7         | 射撃     | S. S. T.    | 日本人出場 川村, 島津, 末川, 村田              |
| "          | 6. 4         | クリケット  | Y. C. C.    |                                   |
| 18         | 6.17         | ボートレース |             | プライベート・マッチ                        |
| "          | 6.16         | "      |             | 隅田川海軍ボートレースに Y. A. R. C. メンバー招待出場 |
| "          | 6.16         | 野球     | Y. B. B. C. | クラブ対海軍                            |
| "          | 6.14         | クリケット  | Y. C. C.    |                                   |
| "          | 6.13         | 射撃     | Y. R. A.    |                                   |
| 7. 2       | 6.31         | 射撃     | S. S. T.    |                                   |
| "          | 6.30         | 野球     | Y. B. B. C. | Y. B. B. C. 対 Y. C. C.            |
| "          | 6.25         | クリケット  | Y. C. C.    |                                   |
| 9          | 7. 4         | 野球     | Y. B. B. C. | Y. B. B. C. 対 Y. C. C.            |
| 16         | 7.14         | 射撃     | Y. Rifle A. |                                   |
| "          | 7.12         | 水泳競技   | Y. A. R. C. |                                   |
| "          | "            | 野球     | Y. B. B. C. | Y. B. B. C. 対 アメリカ海軍              |
| "          | 7.14         | "      | "           | Y. B. B. C. 対 Y. C. C.            |
| 7.23       | 7.18         | "      | "           | "                                 |
| "          | 7.22         | 水泳     | Y. A. R. C. |                                   |
| 30         | 7.26         | 野球     | Y. B. B. C. | Y. B. B. C. 対 Y. C. C.            |
| "          | 7.28         | "      | "           |                                   |
| 8. 6       | 8. 1         | 射撃     | S. S. T.    |                                   |
| 13         | 8. 6         | クリケット  | Y. C. C.    |                                   |
| 9.10       | 9. 3         | 水泳     | Y. A. R. C. |                                   |
| 24         | 9.17         | クリケット  | Y. C. C.    |                                   |
| 10. 8      | 10. 1        | "      | "           | Y. C. C. 対 英国海軍                   |
| "          | 10.21        | "      | "           | Y. C. C. 対 東京, 海軍, ビジター           |
| 29         | 10.29        | ボートレース | Y. A. R. C. |                                   |
| 11. 5      | 10.31        | "      | "           | インターボート・レース 第2日 東艦カッター出場          |
| "          | 11. 4        | 競馬     | N. R. C.    | 秋季大会 第1日                          |
| 12         | 11.5,7,9     | "      | "           | " 第2,3日, 追加日                      |
| 19         | 11.12        | クリケット  | Y. C. C.    | Y. C. C. 対 英国海軍, ビジター             |

表 2-2 Japan Weekly Mail の横浜外人スポーツ行事記事

| 掲載年月日       | 行事月日                      | スポーツ行事     | 団体名           | 備考                                    |
|-------------|---------------------------|------------|---------------|---------------------------------------|
| 1899. 1. 21 | 連日                        | スケート       | Y. Skating C. | 毎日日没後滑走可、リンクコンディション好し                 |
| "           | 1. 一                      | フットボール(ア式) | Y. C. & A. C. | Y. C. & A. C. 対 P. & O. 汽船会社チーム試合     |
| 2. 18       | 2. 11                     | " ( # )    | "             | インターポート・マッチ 横浜対神戸                     |
| 3. 4        | 3. 1                      | "          | "             | クラブ内試合 シーズンおさめ                        |
| 18          | 3. 一                      | ペーパー・チェイズ  | "             | 毎週、フットボール、クリケットのつなぎ                   |
| 25          | 3. 25                     | 漕艇         | Y. A. R. C.   | シーズンびらき                               |
| 4. 15       | 4. 8                      | 自転車レース     | Sorin クラブ     | Y. C. & A. C. グラウンド 日本人、外国人混合         |
| 5. 6        | 4. 29                     | 自転車ロードレース  | N. B. C.      | 藤沢～国府津間 含日本人                          |
| 13          | 5. 8～13                   | 競馬         | N. R. C.      | 日本レース・クラブ 春季競馬会                       |
| 20          | 5. 13                     | 陸上競技会      | Y. C. & A. C. | Y. C. & A. C. 春季大会                    |
| 27          | 5. 20                     | ボートレース     | Y. A. R. C.   | 春季大会                                  |
| "           | 5. 24                     | ヨットレース     | Y. Y. C.      | 女王誕生日大会                               |
| "           | { 5. 20<br>5. 23<br>5. 24 | クリケット      | Y. C. & A. C. | クラブ内試合 3試合                            |
| 6. 3        | —                         | 野球         | "             | Y. C. & A. C. 対ミヤコ・クラブ(日本人チーム)        |
| "           | 5. 27                     | ボートレース     | Y. A. R. C.   | インターポート・レース 神戸対横浜                     |
| 17          | 6. 10                     | 野球         | Y. C. & A. C. | クラブ内試合                                |
| 24          | 6. 17                     | ボートレース     | Y. A. R. C.   |                                       |
| "           | "                         | クリケット      | Y. C. & A. C. | クラブ内試合                                |
| "           | "                         | ヨットレース     | Y. Y. C.      |                                       |
| 7. 8        | 7. 4                      | 野球         |               | } 独立祭行事                               |
| "           | "                         | 自転車レース     |               |                                       |
| "           | "                         | ヨットレース     |               |                                       |
| 22          | 7. 21                     | 自転車レース     |               |                                       |
| "           | 7. 15, 21                 | ヨットレース     | Y. Y. C.      |                                       |
| "           | 7. 15                     | 野球         | Y. C. & A. C. | Y. C. & A. C. 対米艦ペンシルバニア              |
| 8. 12       | 8. 5                      | 水泳、飛込      | Y. A. R. C.   | Y. A. R. C. 大会                        |
| 19          | 8. 12                     | 国際水泳試合     | "             | Y. A. R. C. 対水府流太田派                   |
| 26          | 8. 19                     | クリケット      | Y. C. & A. C. | Y. C. & A. C. 対 P. & O. 汽船会社          |
| 9. 2        | 8. 26                     | 水上競技       | Y. A. R. C.   | Y. A. R. C. 大会 競泳、飛込、水球<br>日本人溝口、池部参加 |
| 9           | 9. 6                      | クリケット      | Y. A. & A. C. | Y. C. & A. C. 対英国艦隊                   |
| 16          | 9. 13                     | "          | "             | "                                     |
| 23          | 9. 14                     | "          | "             | 英国軍艦チーム対抗試合                           |
| "           | 9. 16                     | "          | Y. C. & A. C. | クラブ内                                  |
| 30          | 9. 23                     | 野球         | "             | Y. C. & A. C. 対東京(日本人チーム)             |
| "           | "                         | ヨットレース     | Y. Y. C.      |                                       |
| 10. 21      | 10. 14                    | ボートレース     | Y. A. R. C.   | 秋季大会                                  |
| "           | "                         | クリケット      | Y. C. & A. C. | クラブ内                                  |
| 28          | 10. 23-25                 | "          | "             | インターポート試合                             |
| "           | 10. 26                    | 野球         | "             | "                                     |
| 11. 4       | 10. 28                    | "          | "             | "                                     |
| "           | "                         | 自転車レース     | N. B. C.      | 於クリケット・グラウンド Sorin クラブと合同             |
| 11          | 11. 4, 5                  | クリケット      | Y. C. & A. C. | クラブ内                                  |
| 25          | 11. 20-22                 | 競馬         | N. R. C.      | 日本レース・クラブ秋季大会                         |

会になることがあった。

陸上競技会では、100、220、440ヤード、1/2マイル、1マイルの競走、120ヤードハードル競走、砲丸、ハンマー、クリケットボール投、走高、走幅、棒高跳というような陸上競技的種目の他、二人三脚とかサック・レースといった運動会的な種目も含まれている。記録は表6(28頁)に掲げてある程度で、レベルが高いとは言えない。初期からずっと全種目にハンディキャップ制をとっている。これは年齢、体力、技術等が不揃いで、しかも日常のトレーニング機会の少ない人達の競技会として当然であって、日本流に言えば競技会というよりむしろ居留民運動会という名称の方がふさわしかったのではないかと思われる。

次にボート・レースは神奈川沖から横浜の波止場を結ぶ線か、或は山手の海岸ぞいに本牧岬から波止場を結ぶ線をコースとして用いることが多かったようである。艇は舵手付フォア、同ペア、シングル・スカル、ダブル・スカルを主に用い、1マイルから3/4マイルくらいの距離でレースを行っていた。この両会は横浜のビッグ・イベントであって、外人社会の名士、貴婦人が揃い、時としてはイギリス公使や公使夫人も出席したり、カップを出したりしており、バンドも出演するという盛大さであった。

Y.C. & A.C. のボールゲーム系のスポーツの主な相手は神戸、東京の居留外人のチームや横浜に寄港するイギリス、アメリカの軍艦や汽船の乗組員のチームであった。中期以降クリケットを除いて日本人の学生チームがこれに加わってくる。クリケット、フットボールは試合の半分以上はクラブの中の紅白試合であった。<sup>(注3)</sup>したがって試合数は年により一定していないが、明治20年代のクラブの報告を通覧してみると、年間におおよそ、クリケットが10~10数試合、フットボール(ア式、ラ式)が10試合前後、野球は10以下5程度が平均的な傾向であった。日本人との交流がはじまるにしたがって野球、フットボールの試合数がましてくる。クリケットでは遂に最後まで日本人との交流はなかったのであるが、Y.C. & A.C. の成立の経緯<sup>(注4)</sup>からいって内部では最上位にランクされていた種目であった。毎年の報告書にクリケッ

トだけは個人成績、すなわち Bowling Average や Batting Average が掲載されている。

Y.A.R.C. の水泳系の競技会は、毎夏1、2回行なわれ、1877年が初見である。これも、100、200ヤード、1/2マイルなどの競泳(泳法の指定はないようである)のほか、はしけ競争、樽競争など水上運動会的な種目をも含んでいる。飛び込みは最初から、水球は1890年から行なわれている。

ヨットでは Y. Sailing C. がシーズン中殆んど毎週末にレースを行っており、シーズン末の総会で総合成績が発表されている。後に述べるように、このクラブはレース開催を目的として組織されたらしく、毎年30~50という多くのレースを行なっている。これに比べると M. Y. C. の方はずっとレース数が少ない。

スケートは特に試合とか演技会を催したという記録はない。同クラブの報告によると、1884~5年にかけての冬は気候にめぐまれ、42日以上滑走可能日即ちリンクを開くことができたとしている。<sup>27)</sup> クラブとしては、ひと冬に30日以上滑走可能日があれば満足していたようである。<sup>28)</sup>

自転車では、競技会がロード・レースの時もあれば、クリケット・グラウンドを借りて行なわれることもあったようである。N.B.C. の活動はレースに限らず遠乗りのような場合でも、日本人の大日本 Sorin (走輪か?) クラブと合同して行なっていることが多い。

最後にインターボート競技について触れておこう。いくつかの種目において対外試合として神戸外人のチームとの試合を定期戦化し、これをインターボート・マッチ(或はレース)と呼んで、シーズンのメイン・イベントとしていた。試合は隔年に両港で開催される形式で行なわれ、必ずしも定期的でない場合もあった。ブラックヤモリソンが述べている1871年のボートレース、陸上競技は神戸側の史料によっても、<sup>29)</sup> その最初のものである。陸上競技に関しては、この後あまり例を見ない。クリケット、フットボール(ア式)はそれぞれ1888年11月3日、2月18日に、野球は1898年10月28日に、フットボール(ラ式)は1903年11月26日に、ヨットは1904年9月24日に、ゴルフは1907年8月10日に、最初の記事が見られる。

表3 各クラブ会員数と会計規模の推移

Y. C. & A. C.

| 年次<br>項目     | 1878                 | 85    | 90    | 95    | 99    | 1905       | 11         |
|--------------|----------------------|-------|-------|-------|-------|------------|------------|
| 会 員<br>(人)   | A.A. 63<br>C.C. ?    | 133   | 123   | 209   | 243   | 291        | 270        |
| 会計規模<br>(ドル) | A.A. 924<br>C.C. 827 | 1,573 | 1,471 | 3,287 | 5,090 | 6,989<br>※ | 3,269<br>※ |

注

- ※印は単位 円
- 小数点以下略
- ?の部分は報告に記載なし

Y. A. R. C.

| 年次<br>項目     | 1878  | 84    | 90    | 95    | 99         | 1905       | 10         |
|--------------|-------|-------|-------|-------|------------|------------|------------|
| 会 員<br>(人)   | 101   | 174   | 215   | 300   | 318        | 294        | 292        |
| 会計規模<br>(ドル) | 2,583 | 2,591 | 4,218 | 5,781 | 5,345<br>※ | 4,608<br>※ | 7,502<br>※ |

Y. Sailing C., Y. Yacht. C.

| 年次<br>項目     | 1887 | 95       | 99         | 1905       | 10       |
|--------------|------|----------|------------|------------|----------|
| 会 員<br>(人)   | 82   | 127      | 130        | ?          | ?        |
| 会計規模<br>(ドル) | 661  | 871<br>※ | 1,231<br>※ | 1,110<br>※ | 860<br>※ |

L. L. T. & C. C.

| 年次<br>項目     | 1889  | 1900       | 05         | 10         |
|--------------|-------|------------|------------|------------|
| 会 員<br>(人)   | ?     | ?          | 182        | ?          |
| 会計規模<br>(ドル) | 1,105 | 2,399<br>※ | 3,443<br>※ | 3,699<br>※ |

M. Y. C.

| 年次<br>項目     | 1896 | 1903       |
|--------------|------|------------|
| 会 員<br>(人)   | 65   | ?          |
| 会計規模<br>(ドル) | 898  | 1,713<br>※ |

Y. Skating C.

| 年次<br>項目     | 188* | 90  | 95  |
|--------------|------|-----|-----|
| 会 員<br>(人)   | 50   | 37  | 58  |
| 会計規模<br>(ドル) | 217  | 134 | 311 |

(3) 外国人スポーツ・クラブの規模と運営

前記の諸クラブは入会者からは最初に入会金をとり、年々会費を徴収して、これで運営してゆくという会員制のクラブの形をとっていた。

各クラブの会員数と会計規模の推移を示したのが表3である。

まず会員については、会員を活動会員(正会員)と名誉会員にわけているクラブが多い。名誉会員とは、年齢、仕事等の事情でスポーツ活動はしないが、会費(正会員よりやや安い)を納めている者で、彼らはクラブの有力な財源となっている。表では両者を一括して表わした。婦人会員はレデ

ィス・クラブ以外では認められていないようである。少年会員も非常に例が少ない。従って成人男子が殆んどであるということになる。会員数は1900年頃までは一般に増加の傾向にあり、それ以後は横ばいと言えるであろう。特に会員数の多いY. C. & A. C., Y. A. R. C., Y. Y. C. にそれが現われている。これと、表4の居留地人口の推移を比較して見ると、増加という点では一致するが、増加率はクラブの方が高い。

もう一つの特徴として、居留地人口に対するスポーツ・クラブ員のパーセンテージが非常に高いということである。スポーツ・クラブ員たりうる

表4 横浜在留欧米人国別人口表

| 国籍           | 年 | 1871  | 1877  | 1882  | 1887  | 1892  | 1895           | 1897  |
|--------------|---|-------|-------|-------|-------|-------|----------------|-------|
| イギリス         |   | 453   | 570   | 618   | 694   | 763   | 806(366)       | 869   |
| オーストリー・ハンガリー |   | 7     | 12    | 4     | 16    | 25    | 21( 11)        | 27    |
| フランス         |   | 123   | 140   | 118   | 110   | 119   | 127( 65)       | 187   |
| アメリカ合衆国      |   | 177   | 190   | 255   | 259   | 270   | 325(153)       | 369   |
| ドイツ          |   | 151   | 117   | 161   | 188   | 159   | 166(118)       | 198   |
| スイス          |   | 24    | 24    | 32    | 33    | 60    | 63( 45)        | 82    |
| デンマーク        |   | 16    | 12    | 23    | 22    | 13    | 15( 5)         | 36    |
| ポルトガル        |   | 22    | 31    | 35    | 57    | 78    | 68( 26)        | 49    |
| オランダ         |   | 45    | 71    | 32    | 41    | 44    | 39( 22)        | 50    |
| スウェーデン・ノルウェー |   | 4     | 14    | 5     | 15    | 10    | 26( 19)        | 30    |
| ベルギー         |   | 5     | 12    | 8     | 9     | 7     | 2( 2)          | 7     |
| ハワイ          |   | 0     | 0     | 6     | 0     | 9     | 4( 4)          | 13    |
| イタリア         |   | 36    | 18    | 17    | 20    | 15    | 24( 15)        | 23    |
| ロシア          |   | 2     | 0     | 43    | 6     | 8     | 17( 7)         | 17    |
| メキシコ         |   | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 1( 1)          | 1     |
| スペイン         |   | 0     | 22    | 1     | 8     | 0     | 19( 10)        | 22    |
| ベルギー         |   | 0     | 29    | 0     | 0     | 0     | 1( 1)          | 0     |
| その他          |   | 6     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0( 0)          | 0     |
| 合計           |   | 1,071 | 1,262 | 1,358 | 1,478 | 1,590 | 1,724<br>(870) | 1,985 |

1895年の( )内は成人男子人数

神奈川県史 資料編15近現代(5) 1057頁~1063頁 横浜港在留外国人戸口数表による。

成人男子の全人口に対する比率は、当時の居留地では50~60%弱程度を上下し、年代が下がるほどパーセンテージが下がっている。<sup>30)</sup> 例えば1895年に居留民数1,724人中成人男子870人となっている。また、これらのクラブでは、イギリス、アメリカ系の居留民が主流であったと思われる。というのは、1879年4月19日のJ.W.M.の論説に、“Our Athletic Clubs”という一文があって、この中で、スポーツはアングロ・サクソンの固有の習慣であり遺産であるとしており、「我々の」クラブとしてアスレチック・アソシエーション、フットボール・クラブ、クリケット・クラブ、ベースボール・クラブ、ローイング・クラブ、ローンテニス・クラブをあげている。<sup>31)</sup> ヨット・クラブが後にローイング・クラブから独立したものとすれば、表3にあげたクラブのうち、スケートティング・クラブを除いて、すべてが「我々アングロ・サクソン」のクラブに含まれてしまうのである。これらのクラブの会員全部が両国籍でないにして

も、かなりの部分がイギリス、アメリカ人であったであろう。両国系の成人男子数は1895年で両国人1131名中519名である。<sup>32)</sup> 一方同年のクラブ員数を表3で合計して見ると(レディス・クラブとスケートティング・クラブを除く)636名となり、519名を大はばに上回る。これは1人でいくつものクラブにかけもちで入るか、他国籍が入るかしていなければおかしいことになる。先の論説を見ても、名誉会員の場合は居留地の有力者層がクラブ援助のため、幾つかのクラブに入っていたようであるし、またモリソンの叙述の中にも、横浜の特殊性として、お互いに他のクラブの財政援助のため入会しあったとしている。<sup>33)</sup> このようにして見ると、クラブの会員はイギリス、アメリカ系が多く、いくつかのクラブが人脈的には相互にかなり入り組んだ状態であったと思われる。会員については、以上のような特徴をあげる。

次に会計規模の問題である。クラブの会費は1895年でY. C. & A. C. 10ドル、Y. A. R. C. 12

ドル, Y. Skating C. 3~5ドル, Y. Sailing C. 2ドル, L. L. T. & C. C. 不明(おそらく10~15ドルの間), M. Y. C. は1896年の設立の時5ドルであった。会計規模は会員制クラブのような場合には会員数の増加と並行する筈であるが、実際には必ずしもそうになっていない、というのは居留民の移動が激しく、会員のトータルは変わらない、入退会者が非常に多く、入会金も大きな財源となっているからである。趨勢としては、年代が下がるにつれ会計規模が増大する傾向にある。Y. C. & A. C. が1911年に一挙に半減しているのは、このクラブが2年前の1909年に横浜公園内のクリケット・グラウンドを借地契約期限切れで失ない、専用グラウンド維持費の必要がなくなったので会費を5ドルに値下げしていたからである。<sup>34)</sup> 先にも述べたようにこの数字は経常費に当る部分であり、グラウンド、建物の工事、新しいヨットの購入等々で臨時の大きな支出がある時には、特別に寄付を募ったり、クラブ債を発行したり、銀行の借入金に頼ったりしている。

会員数、会計規模の推移から見ると、1900年前後までが全体として膨張期であり、それ以後は安定期に移ったようである。また、クラブを横に比べて見た場合には、存続の期間、会員数、会計規模の3点から見て、Y. C. & A. C. と Y. A. R. C. とが最も有力なクラブであったことが認められる。

次に会計面からクラブの活動や実態を、もう少し詳しく観察したい。

Y. A. R. C. の、1880、1896年の会計報告を次に掲げる。

最大の財源は会費、入会金の収入で、繰越金を除いて、80年で約90%、96年で約80%を占めている。支出の方は大きくわけて、艇庫、クラブ・ハウス、敷地、棧橋、艇など施設、備品の新設、維持にかかわるもの、人件費、試合経費にわけられる。このうち施設、備品にかかわる部分は繰越金を除く実際の支出のそれぞれ約60%(80年)、約47%(96年)を占めている。ボート・クラブの場合は艇庫が最大の問題であった。1877年にクラブは1000ドルのクラブ債を起して艇庫を建設しており、<sup>37)</sup> 80年の635ドル余の返済はその残金であっ

Y. A. R. C.

1880年 会計報告<sup>35)</sup>

| 収入                 | ドル       | 支出            | ドル      |
|--------------------|----------|---------------|---------|
| 前年度より繰越し           | 241.81   | クラブ債返済(利息共)   | 635.50  |
| 会費、入会金             | 1,532.00 | 建物保険          | 180.06  |
| 大会参加、リボン、ジャージ売上    | 80.60    | 地代            |         |
| ボート使用料             | 60.00    | 新艇、オール        | 413.48  |
| 利子                 | 7.61     | 賞品            | 183.83  |
| 計                  | 1,922.02 | 棧橋、修繕         | 93.91   |
| 差引不足               | 199.23   | ボート塗装         | 120.40  |
| 他にボートハウス移動、施設材料保管費 | 100.00   | 印刷、広告         | 38.15   |
| 明年度へ赤字繰り越し         | 299.23   | 写真            | 53.25   |
|                    |          | 船頭賃銀          | 136.61  |
|                    |          | ランチ備い         | 19.00   |
|                    |          | 物品(箱、物指、ジャージ) | 38.78   |
|                    |          | ボート大会費        | 83.18   |
|                    |          | 雑費、その他        | 115.10  |
|                    |          |               | 2121.25 |

1896年 会計報告<sup>36)</sup>

| 収入           | ドル       | 支出              | ドル       |
|--------------|----------|-----------------|----------|
| 前年度より繰越し     |          | 船頭、人夫賃銀         | 659.88   |
|              | 1,168.56 | クラブ・ハウス保険、地代    | 136.84   |
| 会費、入会金       | 3,611.00 | " 塗装、板張         | 340.78   |
| 大会参加費        | 149.00   | ガス、水、修繕等        | 461.79   |
| クラブ・ハウスのパー収益 | 716.21   | 棧橋、はしけ等         | 694.10   |
| ジャージ売上       | 63.13    | ボート修理塗装         | 325.67   |
| 利息           | 15.81    | ボート、水泳大会経費、賞品   | 978.31   |
|              | 5,781.69 | 印刷              | 212.23   |
|              |          | インターボートのためボート輸送 | 241.47   |
|              |          | その他             | 64.50    |
|              |          | 来年度へ繰越し         | 1,663.99 |
|              |          |                 | 5,781.69 |

た。ところが、1879年この艇庫は新地主となった三菱汽船会社の要求で引き払わざるをえなくなり、80年は丁度新敷地を求めている時であった。同年フランス波止場付近に特別貸渡地を得てここに新艇庫を建設することになる。この時には、防波堤と艇庫建設費として、築堤費は1,560円、艇庫建築費は1,750ドルと見積られ、2,500ドルのクラブ債を募集している。<sup>38)</sup> この負債は1892年中までに支払い終わっており、この後クラブは財政的

にも安定してくる。

Y. C. & A. C. については、設立の翌年の1886年および1896年のものを掲げる。

Y. C. & A. C.

1886年 会計報告<sup>39)</sup>

| 収入        | ドル       | 支出                               | ドル       |
|-----------|----------|----------------------------------|----------|
| 前年度より繰越し金 | 115.32   | 芝生手入, 走路, クラブハウス修理               | 286.27   |
| 会費, 入会金   | 1,395.00 | テニス経費 (ボールボーイ, 石灰など)             | 96.94    |
| リボン等売上    | 4.95     | 門番賃銀                             | 117.79   |
| 陸上競技会収益   | 54.05    | 人夫代, 草刈機修理等                      | 364.65   |
| 利息        | 3.94     |                                  |          |
| 計         | 1,573.26 |                                  |          |
|           |          | 運動具 (テニス・ネット, ボール, 砲丸, ハンマー) 芝刈機 | 118.22   |
|           |          | 印刷, 広告                           | 29.65    |
|           |          | 火災保険                             | 24.00    |
|           |          | グラウンド借用料                         | 328.22   |
|           |          | 弔慰金                              | 20.00    |
|           |          | 試合経費                             | 56.40    |
|           |          | 来年度へ繰越し                          | 248.91   |
|           |          | 計                                | 1,573.26 |

1896年<sup>40)</sup>

| 収入         | ドル       | 支出                              | ドル       |
|------------|----------|---------------------------------|----------|
| 前年度より繰越し   | 158.59   | 人件費 (門番, 人夫, 草刈, 芝植, クラブ・ハウス修理) | 1,234.17 |
| 銀行当座預金     | 300.00   | 試合経費                            | 461.81   |
| 入会金        | 355.00   | 運動用具                            | 491.06   |
| 会費         | 2,014.00 | グラウンド借用料                        | 328.20   |
| バット, ボール売上 | 152.24   | 陸上競技会経費                         | 349.56   |
| 陸上競技会参加費   | 303.00   | 保険                              | 24.59    |
| 利子その他      | 24.69    | 繰越し金                            | 398.11   |
|            | 3,287.52 |                                 | 3,287.52 |

このクラブも収入は専ら会費, 入会金に頼っている。支出の方は, このクラブの場合には, 横浜公園内にある専用グラウンドとその付属施設の維持が最大の対象であった。施設関係費は, グラウンド・キーパーの賃金まで含めて, 1886年で約80%, 96年で約55%に達する。グラウンドの広さは, 1872年 Y. C. C. が最初に借りた時には2025坪であったが, 少しずつふえ, 84年 Y. C. & A. C. 設立の年には5516坪に達していた。<sup>41)</sup> この借地料は100坪当たり6ドルであった。このように広いグラウンドの芝の植え付けと維持には出費が多かつ

たらしく, Y. C. C. の時代でもすでに, Turfing scrip と称する借金をしたようで, 1879年にその負債が338ドル余も残っていた。<sup>42)</sup> またクラブ・ハウスも前後3回建設しており,<sup>43)</sup> そのたびに別途の募金を行っていたようである。

Y. C. & A. C. と Y. A. R. C. の経営の方針は, グラウンド, クラブ・ハウス, 艇庫というような大きな施設や, そこで用いる備品などを会員の負担で徐々に築き上げ, そこを拠点として自分達のスポーツ活動を行なう, という方向に進んでいる。しかし Y. C. & A. C. は後にグラウンドの問題で大いに苦しむことになる。<sup>(注5)</sup>

Y. Skating C. の場合には, 全期を通じ会計報告の内容に大きな変化がないので, 1895年のもののみを掲げる。

Y. Skating C.

1895年 会計報告<sup>44)</sup>

| 収入      | ドル     | 支出             | ドル     |
|---------|--------|----------------|--------|
| 会費      | 187.00 | 青木氏へ Rink 代支払い |        |
| 前年度繰越し金 | 124.20 | 1回目            | 60.00  |
|         |        | 2 "            | 50.00  |
|         |        | 3 "            | 25.00  |
| 計       | 311.20 | 広告             | 7.50   |
|         |        | 雑費             | 13.62  |
|         |        | 来年度へ繰越し        | 155.08 |
|         |        | 計              | 311.20 |

会費の額に差があるのは, 滑走頻度によるものであろうが, このクラブも会費収入が財源のすべてである。繰越し金を除いた支出の大半を占めるのは, 青木氏へのリンク代の支払である。青木とはリンクの土地の所有者で, おそらく1876年の横浜毎日新聞にでてきたリンクの創設者青木安兵衛本人か,<sup>45)</sup> 又はその縁者であろう。ここではクラブがリンクの経営者ではなくて, 単なる利用者に過ぎなかったようである。またクラブ・ハウスのものに対する出費も見られない。このように見るとこのクラブには, スケートのための拠点を作ろうとする意図があったとは思われない。このあたりに, クラブとして薄弱で恒常性に乏しいことが感じとられる。実際, 総会報告書を見ると, 時々クラブを存続すべきか否かが議論されているのである。

次に Y. Sailing C. にうつると, このクラブも

膨張の傾向を辿っているが、前後で質的に大きな変化はないので、1895年の分のみを掲げる。

Y. Sailing C.

1895年会計報告<sup>46)</sup>

| 収入          | ドル     | 支出     | ドル     |
|-------------|--------|--------|--------|
| 会費 127人×2ドル | 254.00 | 賞品     | 723.76 |
| レース申込金      | 150.00 | 旗船備い賃  | 57.10  |
| 賞品代寄付       | 462.17 | 印刷     | 54.75  |
| その他         | 5.00   | ランチやとい | 26.00  |
| 計           | 871.17 | 測量費    | 5.00   |
|             |        | 銃、火薬   | 7.94   |
|             |        | 集金費    | 6.72   |
|             |        | 人夫賃    | 4.90   |
|             |        | 計      | 871.17 |

このクラブの会計の構造は他とはかなり違っている。まず会費が非常に安く、入会金はない。会費収入は全体の30%以下にすぎない。支出とも関連するが、レースに対する賞品の寄付が収入の50%以上で、支出の90%近くを占めている。この寄付は会員或いは外部の会社などから出されている。また設備面の出費は全くない。だいたいヨットの所有者は居留民中でも富裕な層に属する人達であろう。その人達のクラブの会費が安く、資産もないのは全く解せない。しかしこの点にこそこのクラブの設立の趣旨があったようである。すなわち、設立趣旨は誰でもが入りやすいように会費を下げ、入会金をなくすこと、ヨット・レースを愛する者の集まりにし、横浜にヨットを植え付けることをその目的とする、というのである。<sup>47)</sup> このクラブはヨットの所有者達の集まりで、専らレースを組織するためのクラブであったと思われる。(この翌々年クラブに登録されているヨットは29隻となっている。)したがって年間のレース数も既述のように常に多かったのであろうし、また施設の如きものに投資しなかったのであろう。

これに対して同じヨット・クラブでもM.Y.C.は少し性格が異なる。1896年設立第1年度の会計報告を掲げる。

会費は5ドル、入会金15ドルで最初からクラブ債を起して42フィート級のヨットを買い、夏には富岡海岸の寺院を借りて、そこにヨットと水泳の基地を置いている。この年の最大の事業はヨット

M. Y. C.

1896年 会計報告<sup>48)</sup>

| 収入          | ドル     | 支出                 | ドル     |
|-------------|--------|--------------------|--------|
| 会費 65人×5ドル  | 325.00 | ヨット購入              | 518.19 |
| 入会金11人×15ドル | 165.00 | 富岡クラブ・ハウス(5~10月)関係 | 130.56 |
| クラブ旗売上      | 16.80  | 旗                  | 21.00  |
| ヨット登録費      | 7.50   | 印刷、通信その他           | 50.28  |
| 寄付          | 21.50  | 船頭、人夫賃銀            | 81.63  |
| 〃           | 12.00  | ヨット保険              | 5.00   |
| 飲料売上収益      | 1.09   | 利子(債券)             | 9.35   |
| 起債(50ドル×7)  | 350.00 | 雑費                 | 41.45  |
| 計           | 898.98 | 来年度へ繰越し            | 41.43  |
|             |        | 898.89             |        |
|             |        | 資産 ヨット1隻、はしけ       | 466.37 |
|             |        | 家具、旗、現金            | 58.20  |
|             |        | 524.57             |        |
|             |        | 負債 クラブ債(7)         | 350.00 |
|             |        | 利息                 | 2.04   |
|             |        | 352.04             |        |

の購入で、会員は交代でこれを利用したようである。またこの年から横浜近辺に艇庫用敷地の物色をもしている。このクラブはY.Y.C.とは少し方針の異なった、むしろY.A.R.C.的な性格を志向するクラブといえよう。小さな横浜外人社会に二つのヨットクラブが並存したのは、このような性格の違いによるものであろう。

最後に L. L. T. & C. C. を見よう。

これは1890年の分で、このクラブが新聞記事に現われた最初の例である。このクラブの特徴は、もちろん女性のクラブというところにあるが、一方では名誉会員が非常に多いことである。1906年の例では正会員68名に対し名誉会員は114名となっている。また、山手公園貸渡の事情から言って、<sup>(注5)</sup> このクラブが山手公園全体の維持の経費を負担していたようである。支出の項目にテニスコートの維持だけでなく、公園全体の維持にかかわる庭師の賃銀のような項目が見られるのはそのためであろう。またこの年の報告書の中にも、公園維持費捻出のため、非会員が年間3ドルのピジター・フィーを払って家族づれで入園することを歓迎することなどが掲げられている。

## L. L. T. &amp; C. C.

1890年 会計報告<sup>49)</sup>

| 収入                 | ドル       | 支出         | ドル       |
|--------------------|----------|------------|----------|
| 前年度より繰越し           | 94.90    | 堤芝生        | 8.00     |
| 会費, 入会金            | 806.00   | 芝肥料        | 10.00    |
| ビジター会費             | 48.50    | ダブルス勝者へ賞品  | 14.00    |
| ダブルス・トーナメント<br>登録費 | 14.00    | 会費徴収       | 20.00    |
| シングルス "            | 6.00     | 茶, 砂糖      | 34.69    |
| ガーデンパーティー収益        | 114.30   | グラウンド借地料   | 150.00   |
| バザーへ公園貸料           | 15.00    | ボール        | 147.57   |
| 香港上海銀行より           | 7.05     | 女子更衣室再建    | 40.05    |
| 計                  | 1,105.75 | 柵, スタンド修理  | 117.80   |
|                    |          | サマーハウス修理   | 11.00    |
|                    |          | コップ, ソース入れ | 3.00     |
|                    |          | 庭師制服       | 14.00    |
|                    |          | 宴会費        | 17.05    |
|                    |          | 庭師賃銀       | 424.00   |
|                    |          | 草刈り人夫賃     | 8.00     |
|                    |          | 芝刈機修理      | 15.00    |
|                    |          | 来年度へ繰越し    | 7.05     |
|                    |          | 計          | 1,105.75 |

以上会計面から、いくつかのクラブの実態や方向を考察してみた。Y.Y.C.を例外として、他はすべてが会費と入会金の収入を主財源として、運営されていたクラブであるが、彼らは会員相互の力で、自身のスポーツや社交の場を着々として築いて行くといった地道なスポーツ・クラブの方向を示している。特にY.A.R.C.やY.C.&A.C.のような大クラブはその典型で、施設の建設、維持に大きな投資を続けていることが注目される。

## 引用文献

- 1) J. W. M.: Mar. 3rd 1894
- 2) J. W. M.: Mar. 7th 1896
- 3) J. W. M.: Mar. 6th 1897
- 4) Iの(注1)参照
- 5) J. W. M.: Nov. 15th 1873
- 6) Iの(14)と同じ
- 7) 横浜市役所編: 横浜市史稿風俗篇, 1932, 651頁
- 8) 横浜市編: 横浜市史3巻下, 前掲 807頁
- 9) Iの(10)と同じ
- 10) 神奈川県史資料編15近現代5 前掲 1057~1063頁
- 11) J. W. M.: Nov. 28th 1874
- 12) J. W. M.: Jan. 4th 1879
- 13) 横浜毎日新聞: 1876年1月19日
- 14) 朝野新聞: 1877年1月20日
- 15) History of Yachting in Yokohama J. W. M.: May 7th 1904

- 16) J. W. M.: Dec. 12th 1896
- 17) Iの(18)と同じ
- 18) 日本体育協会監修: 現代スポーツ百科事典, 1970, 大修館, 370頁
- 19) J. W. M.: Dec. 12th 1906
- 20) 西村貫一: 日本ゴルフ史, 前掲 331頁
- 21) Iの(11)と同じ
- 22) 横浜市史3巻下, 前掲 788頁
- 23) J. W. M.: Apr. 21th 1877
- 24) Yokohama Jockey Club 規約 J. W. M.: Mar. 2nd 1878
- 25) 横浜市史3巻下, 前掲 811頁
- 26) J. W. M.: Jun. 12th 1880
- 27) J. W. M.: Dec. 19th 1885
- 28) J. W. M.: Dec. 15th 1888
- 29) Williams, H. S.: Kobe Regatta & Athletic Club 1870~1970 p. p. 8~9
- 30) IIの(10)と同じ
- 31) J. W. M.: Apr. 19th 1879
- 32) IIの(10), (30)と同じ
- 33) History of Yokohama Country and Athletic Club
- 34) J. W. M.: Apr. 6th 1912
- 35) J. W. M.: Jan. 17th 1880
- 36) J. W. M.: Feb. 1st 1896
- 37) J. W. M.: Mar. 8th 1879
- 38) J. W. M.: Feb. 1st 1890
- 39) J. W. M.: Mar. 27th 1886
- 40) J. W. M.: Mar. 7th 1896
- 41) 神奈川県史資料編15近現代5 前掲 699~701頁
- 42) J. W. M.: Mar. 22th 1879
- 43) Y. C. & A. C. Pavillion 落成式におけるJ. P. モリソンの講演 J. W. M.: Dec. 17th 1898
- 44) J. W. M.: Dec. 21th 1895
- 45) IIの(13)と同じ
- 46) J. W. M.: Dec. 28th 1895
- 47) J. W. M.: Mar. 24th 1888
- 48) J. W. M.: Dec. 12th 1896
- 49) J. W. M.: Mar. 1st 1890

## 注

- (注1) Y.C. & A.C. の1884年の合併による設立および1912年の改組, 改称は, スポーツ・クラブのあり方やその変遷, イギリス・アメリカ系の各種スポーツ固有の性格などを垣間見る事例として興味のある問題であるが, ここでは直接関係がないので触れない。その概略については1975年第26回体育学会大会体育史シンポジウム「スポーツ・クラブ—その歴史的考察—」で報告した。
- (注2) 日曜日は Sabbath Day であるので, スポーツの行事は行なわれていない。1882, 1884両年のY.C.C. 総会では, 日曜日にクラブのグラウンドを開くかどうかで, かなりの議論が行なわれている。
- (注3) この紅白試合のグルーピングに, 当時の居留地のイギリス人の社会の状況をうかがわせるものがあるとおもしろい。例えば, ファミリー・ネームのA

～L対M～Zとか、30歳以上対30歳以下とか、既婚者対未婚者とか、出身地別にイングランド対ワールド(その他の意味)とか、職種から茶、絹関係者対その他とか、パブリック・スクール出身者対ノンパブリック・スクールとかいうのがある。

- (注4) 1884年の合併は対等の合併ではなく、Y.C.C.がすでに横浜公園のグラウンドの借地権を持ち、クラブ・ハウス等の資産を有し、投資もしていたので、他の3クラブがY.C.C.に吸収される形で行なわれている。クラブの役員もクリケットのグループから多く出ようになっていた。(J.W.M. Apr. 12 th 1884, Y.C.C. 特別総会記事より)
- (注5) クリケット・グラウンドは条約改正発効後、Y.C. & A.C. があらためて横浜市と10カ年間の借地契約を結んで借りていたのであったが、1909年7月28日に期限が切れ、市は再契約を結ばず、収公して一般用の運動場にすることにしたので、Y.C. & A.C. は専用グラウンドを失ない、3年後の1912年新たに矢口台に約6800坪の土地を買い求めて移転した。この事件が、Y.C. & A.C. 改組の直接の原因であった。
- (注6) 横浜山手式百三拾番公園地貸渡証(I—(8)参照)の第2条に「前頭ノ委員(L.L.T. & C.C.の委員…筆者注)ハ其山手公園ノ保護ヲ司トルヘク但シ其保護ノ方法タル日々其ノ景状ヲ整頓シ現今ノ地内ニ在ル草木類悉皆ヲ管守シ其園地周囲ノ柵欄ヨリ又其園中ニ在ル諸建物ニ至ルマテ尽ク之ヲ保全シ又園内ニ夜中外人ノ闖入ヲ防クコト即チ是レナリ」とある。

### III 横浜外国人スポーツ・クラブと日本のスポーツ

#### (1) 日本人とのスポーツ交流の概観

外国人スポーツ・クラブが日本人とスポーツの面でどんな交流があったであろうか、一般的な傾向をみてゆく。

この場合に交流というのは、日本人と外人スポーツ・クラブのメンバーとが、一つの場で合同してスポーツを行なう、という程度に考えておきたい。例えば、日本人と外人クラブが対抗試合やレースを行なうというのが最も端的な例である。また、相互に競技会に招待され、そこで自分達だけのレースを行なう(所謂招待レース)も含まれるし、サイクリングのように競技でなく、合同で遠乗りに出かけるというのも含めるのである。「交流」をこのように考えたうえで、彼我のスポーツ交流を年表にしたのが、表5である。

この年表を作成するにあたって、J.W.M.の記事のみでは脱漏があると思われたので、日本側の

記録によって補った。脱漏の例をあげれば、ラグビーで慶応義塾のチームがY.C. & A.C.に初勝利をおさめたのは、1908年11月4日三田綱町のグラウンドにおいてであるとされているが、<sup>1)</sup>J.W.M.にはこの記事が見あたらない。概して東京で行なわれた試合の記事もれが多いようである。そこで、交流の全般にわたるものに関しては、近代体育スポーツ年表、スポーツ80年史、個々の種目や学校チームのそれに関しては、論文末に掲げた各学校史、学校運動部史、学校雑誌、個別スポーツ史などによった。

J.W.M.に現われた彼我交流の最も古い例は、Y.A.A.A.時代の1873年11月15日に射撃場で行なわれた第1回の陸上競技大会に、日本人のみの1/4マイル・レースの記録が残っている。このレースでは10人がスタートして5人は途中で棄権し、1着のタイムは66秒であったと記録されている。<sup>2)</sup>この人達については、名前も身分も残されていないので全くわからないが、この前々年に神戸で行なわれたK.R. & A.C.の陸上競技会には日本人が参加したという記録がないので、<sup>3)</sup>彼らはおそらく国内で西洋式のレースを行なった最初の日本人ではなかろうか。

この例は大へん珍しいものである。これは別として、まだ学校のスポーツが芽生えてこない段階である明治初年から10年代半ばまでの間の交流の中心は、日本側では軍人であった。表5のように、射撃とレガッタでのカッター・レースがそれで、射撃のほうは当時すでに国際的射手であった村田経芳を筆頭として山田、島津、末川、Tasae(多勢か?)などの名が見える。軍人といっても彼らは将校であろう。カッター・レースの方は隅田川の海軍レガッタと横浜のY.A.R.C.のレガッタで、こちらは日本軍艦の水兵によるカッター・レースであった。この両方とも、この後J.W.M.記事上では記録が見当たらない。

日本人の陸上競技会乃至運動会は、1874年3月21日の築地海軍兵学寮のそれが最初のものでとされており、札幌農学校(1878)、東京大学(1883)と続き、一方小・中学校でも運動会という形で急速に広まってゆく。<sup>4)</sup>

これとならんで、漕艇も明治10年代半ば頃から

表5 横浜外人スポーツ・クラブと日本人のスポーツ交流年表

種目略号 A…陸上競技, A・F…サッカー, B・B…野球, Cr…クリケット, Cy…自転車, H…ホッケー  
R…漕艇, R・F…ラグビー, Sh…射撃, Sw…水泳, T…テニス

| 年    | 月日        | 種目  | 記 事                                 | 備 考               |
|------|-----------|-----|-------------------------------------|-------------------|
| 1873 | 11.15     | A   | Y. A. A. A. 大会に日本人 1/4 マイル・レースあり    |                   |
| 74   | 11.24, 25 | Sh  | Y. R. A. 射撃会に村田ら出場                  |                   |
| 80   | 12.~      | Sh  | S. S. T. 大会で村田優勝                    |                   |
| 81   | 6. 2      | R   | Y. A. R. C. レガッタに海軍カッターレースあり        |                   |
|      | 6. 7      | Sh  | S. S. T. 大会に川村, 島津, 村田ら出場           |                   |
|      | 6.16      | R   | 隅田川海軍レガッタに Y. A. R. C. メンバー出場       |                   |
| 82   | 4.17      | Sh  | S. S. T. 大会に村田, 山田ら出場               |                   |
|      | 5.27      | Sh  | 同 上                                 |                   |
| 85   | 6. 6      | A   | 東大陸上運動会に Y. C. & A. C. 会員出場         | 招待レース             |
|      | 11. 3     | R   | 東大学生, Y. A. R. C. レガッタで外人とレースを行なう   | 外人勝つ              |
| 86   | 5.29      | A   | 帝大運動会に Y. C. & A. C. 会員出場           | 招待レース             |
|      | 10.21     | R   | 帝大三学部学生, Y. A. R. C. レガッタに出場        | 同 上               |
| 87   | 4.16      | R   | Y. A. R. C. 会員, 帝大レガッタに出場           | 同 上               |
|      | 10.29     | A   | Y. C. & A. C. 会員, 帝大陸上運動会に出場        | 同 上               |
|      | 11.12     | A   | 帝大学生, Y. C. & A. C. 競技会に出場          | 同 上(220ヤード)       |
| 88   | 10.13     | R   | 帝大学生, Y. A. R. C. レガッタに出場           | 同 上               |
| 89   | 6.15      | R   | 高商生徒, Y. A. R. C. レガッタに出場外人とレースを行なう | 外人勝つ              |
|      | 10.13     | R   | 帝大医・工学生, Y. A. R. C. レガッタに出場        | 招待レース             |
| 90   | 4.~       | R   | 高商, Y. A. R. C. 会員サラベルのコーチをうける      |                   |
|      | 10.25     | A   | Y. C. & A. C. 会員, 帝大陸上運動会に出場        | 招待レース             |
|      | ~         | B・B | この年から94年まで白洲, Y. C. & A. C. で野球を行なう |                   |
| 91   | 5.23      | R   | 帝大学生, Y. A. R. C. レガッタに出場           | 招待レース             |
|      | 10.24     | R   | 同 上                                 |                   |
| 92   | 11.12     | A   | Y. C. & A. C. 競技会に坂本出場              |                   |
| 94   | 5. 5      | R   | 帝大学生, Y. A. R. C. レガッタに出場           | 招待レース             |
| 95   | 11.~      | R   | 帝大クルー, 固定席艇で Y. A. R. C. クルーを破る     | 一高校友会雑誌より         |
| 96   | 5~7月      | B・B | 一高, Y. C. & A. C. と野球を行なう, 2勝1敗     | 5.23, 6.12, 7.4   |
|      | 9. 5      | Sw  | 坂本, Y. A. R. C. 水球に出場               | 翌年も出場している         |
| 97   | 5.15      | R   | 一高, Y. A. R. C. レガッタで外人とレースを行なう     | 外人勝つ              |
|      | 6. 3      | B・B | 一高' 15-6 Y. C. & A. C.              |                   |
|      | 11. 3     | Cy  | N. B. C., 東京で Sorin クラブと合同サイクリング    |                   |
| 98   | 7. 4      | B・B | Y. C. & A. C. 独立祭野球試合に片柳, 山本出場      |                   |
|      | 8.13      | Sw  | Y. A. R. C., 水府流太田派と競泳 於横浜          | 2-1 水府流勝つ         |
|      | 10. 1     | B・B | Y. C. & A. C. 13-12 ミヤコ・クラブ         |                   |
|      | 12.10     | Cy  | Y. C. & A. C. 自転車競技に東京自転車クラブ出場      |                   |
| 99   | 4. 8      | Cy  | Sorin クラブと外人と合同サイクリングレース            |                   |
|      | 4.29      | Cy  | N. B. C. ロードレースに日本人出場               | ロード・レース<br>藤沢~国府津 |
|      | 6.~       | B・B | Y. C. & A. C. 37-13 ミヤコ・クラブ         |                   |
|      | 8.12      | Sw  | Y. A. R. C., 水府流太田派と競泳 於向島          | 2-1 水府流勝つ         |
|      | 8.26      | Sw  | Y. A. R. C. 水泳大会に溝口, 池部出場           | エキジビション           |
|      | 9.23      | B・B | Y. C. & A. C. 対東京                   | チームの内容不明          |
| 1900 | 4.28      | Cy  | N. B. C., Sorin クラブと合同レース           | ロード・レース           |
|      | 5. 6      | R   | Y. A. R. C., 横浜有志漕大会に出場             | 招待レース             |

| 年     | 月 日   | 種 目       | 記 事   | 備 考                             |
|-------|-------|-----------|---|---------------------------------|
| 1900  | 6. 2  | B・B       | 一高, 14-7 Y.C. & A.C.                        |                                 |
|       | 7. 4  | B・B       | Y.C. & A.C. 対東京                             | 一高OBを含む                         |
|       | 9.15  | B・B       | " 8-7 横浜商業                                  |                                 |
|       | 10.27 | B・B       | " 9-3 慶応                                    |                                 |
|       | 11.10 | Cy        | N. B. C., Sorin クラブと合同サイクリング・レース            |                                 |
|       | 12.26 | R・F       | Y.C. & A.C. ラグビーに田中出場                       |                                 |
| 1901  | 5.25  | B・B       | Y.C. & A.C. 6-5 一高                          | 死球事件                            |
|       | 6.15  | B・B       | " 11-7 学習院                                  |                                 |
|       | 7.20  |           | " 9-6 慶応                                    |                                 |
|       | 9.28  | B・B       | " 9-7 横浜商業                                  |                                 |
|       | 10.26 | B・B       | " 12-6 帝大                                   |                                 |
| 12. 9 | R・F   | " 32-5 慶応 | 初試合   |                                 |
| 1902  | 5.10  | B・B       | 一高 4-0 Y.C. & A.C.                          | スコルク・ゲーム                        |
|       | 6. 7  | B・B       | Y.C. & A.C. 一 横浜商業                          | スコア不明                           |
|       | 6~8月  | B・B       | 横商生徒, Y.C. & A.C. に参加し試合を行なう                |                                 |
|       | 7. 4  | B・B       | 横浜商業 8-5 Y.C. & A.C.                        |                                 |
|       | 9.27  | B・B       | Y.C. & A.C. 一 学習院                           | スコア不明                           |
|       | 10.11 | B・B       | " 一 横浜商業                                    | "                               |
| 1903  | 6.13  | B・B       | " 一 "                                       | "                               |
|       | 5.20  | B・B       | 一高 27-0 Y.C. & A.C.                         |                                 |
|       | 9.26  | B・B       | Y.C. & A.C. 一 横浜商業                          | スコア不明                           |
|       | 10.10 | B・B       | 早稲田 9-7 Y.C. & A.C.                         |                                 |
|       | 12. 5 | R・F       | Y.C. & A.C. 44-0 慶応                         |                                 |
|       | —     | Cy        | N. B. C., Sorin クラブと向島で合同サイクリング             | 月日不明 1904年N. B. C 総会報告より        |
| 1904  | 2. 6  | A・F       | Y.C. & A.C. 9-0 高等師範                        | 初試合 一説では 10-0                   |
|       | 2.20  | R・F       | " 一 慶応                                      | スコア不明                           |
|       | 6. 4  | B・B       | 一高 8-0 Y.C. & A.C.                          |                                 |
|       | 6.18  | B・B       | Y.C. & A.C. 2-0 慶応                          |                                 |
|       | 7. 2  | B・B       | 早稲田 28-3 Y.C. & A.C.                        |                                 |
|       | 7. 4  | B・B       | 慶応 20-5 "                                   |                                 |
|       | 7.16  | B・B       | Y.C. & A.C. 2-0 学習院                         |                                 |
|       | 8.12  | B・B       | " 22-13 慶応                                  |                                 |
|       | 9.24  | B・B       | 早稲田 18-2 Y.C. & A.C.                        |                                 |
|       | 12. 8 | R・F       | Y.C. & A.C. 17-0 慶応                         |                                 |
|       | 1905  | 1.28      | A・F   | " 6-1 高等師範                      |
| 6.21  |       | T         | " と横浜商業テニス試合 3-1 Y勝                         |                                 |
| 7.11  |       | Cr        | " 対東京外人クリケットに松方, 山坂出場                       |                                 |
| 7.15  |       | B・B       | " 6-4 横浜商業                                  |                                 |
| 9.23  |       | B・B       | 学習院 7-1 Y.C. & A.C.                         |                                 |
| 10. 7 |       | B・B       | " 7-0 "                                     |                                 |
| 12. 9 |       | R・F       | Y.C. & A.C. 11-0 慶応                         |                                 |
| 1906  | 1.30  | A・F       | " 1-0 高師                                    | J. W. M. ではボーイズ・ブリゲード・チームになっている |
|       | 2.17  | R・F       | " 9-0 慶応                                    |                                 |
|       | 6. 9  | T         | Y.C. & A.C. 対東京ローンテニスクラブ試合に朝吹, 山崎, 細川, 松方出場 |                                 |

| 年     | 月 日   | 種 目             | 記               | 事            | 備 考 |     |                             |
|-------|-------|-----------------|-----------------|--------------|-----|-----|-----------------------------|
| 1906  | 6.31  | B・B             | 横浜商業 8-1        | Y.C.& A.C.   |     |     |                             |
|       | 7.4   |                 | 3-1             |              |     |     |                             |
|       | 9.8   | B・B             | Y.C.& A.C. 9-0  | 横浜商業         |     |     |                             |
|       | 9.22  | B・B             | 学習院 8-3         | Y.C.& A.C.   |     |     |                             |
|       | 9.30  | B・B             | " 3-2           | "            |     |     |                             |
|       | 10.6  | B・B             | 早稲田 4-2         | "            |     |     |                             |
|       | 10.14 | B・B             | Y.C.& A.C. 3-2  | 早稲田          |     |     |                             |
|       | 10.20 | B・B             | 学習院 4-1         | Y.C.& A.C.   |     |     |                             |
|       | 11.24 | R・F             | Y.C.& A.C. 6-4  | 慶応           |     |     |                             |
|       | 12.29 | A・F             | " 6-0           | 高師           |     |     |                             |
|       | 1907  | 1.19            | H               | " 6-0        |     | 慶応  | 初試合 一説では 5-0                |
|       |       | 1.26            | R・F             | " 9-0        |     | 慶応  |                             |
|       |       | 3.-             | H               | " 4-0        |     | 慶応  |                             |
|       |       | 4.27            | A・F             | " 7-0        |     | 高師  | Y.C.& A.C.にボーイズ・ブリゲード・チーム混入 |
| 5.11  |       | B・B             | 早稲田 12-2        | Y.C.& A.C.   |     |     |                             |
| 6.22  |       | B・B             | 慶応 8-2          | "            |     |     |                             |
| 7.4   |       | B・B             | 早稲田 5-2         | "            |     |     |                             |
| 7.6   |       | B・B             | Y.C.& A.C. 6-4  | 学習院          |     |     |                             |
| 7.14  |       | B・B             | 横浜商業 1-0        | Y.C.& A.C.   |     |     |                             |
| 7.27  |       |                 | 2-14            |              |     |     |                             |
| 8.31  |       | B・B             | Y.C.& A.C. 13-0 | あけぼのクラブ      |     |     |                             |
| 9.28  |       | B・B             | 早稲田 2-10        | Y.C.& A.C.   |     |     |                             |
| 10.5  |       |                 | 12-1            |              |     |     |                             |
| 10.12 |       |                 | 3-2             |              |     |     |                             |
| 11.30 |       | R・F             | Y.C.& A.C. 8-3  | 慶応           |     |     |                             |
| 12.7  |       | H               | " 8-0           | "            |     |     |                             |
| 1908  |       | 1.11            | A・F             | " 5-2        | 高師  | 初勝利 |                             |
|       | 1.25  | " 0-1           |                 |              |     |     |                             |
|       | 2.1   | 1-4             |                 |              |     |     |                             |
|       | 1.25  | H               | " 5-2           | 慶応           |     |     |                             |
|       | 1.30  |                 | " 8-0           |              |     |     |                             |
|       | 1.30  | R・F             | " 25-0          | 慶応           |     |     |                             |
|       |       |                 | " 30-0          |              |     |     |                             |
|       | 6.11  | B・B             | 慶応 9-0          | Y.C.& A.C.   |     |     |                             |
|       | 6.13  | B・B             | Y.C.& A.C. 12-2 | 横浜商業         |     |     |                             |
|       | 6.20  |                 | 13-3            |              |     |     |                             |
|       | 7.4   | B・B             | " 5-4           | "            |     |     |                             |
|       | 7.4   | B・B             | " 7-1           | 学習院          |     |     |                             |
|       | 7.11  | B・B             | " 5-2           | 慶応           |     |     |                             |
|       | 7.25  | B・B             | " 11-5          | 横浜ベースボール・クラブ |     |     |                             |
|       | 8.15  |                 | 3-2             |              |     |     |                             |
|       | 8.29  | B・B             | 早稲田 6-5         | Y.C.& A.C.   |     |     |                             |
|       | 9.26  | B・B             | オール横浜 3-2       | "            |     |     |                             |
| 10.10 | B・B   | 早稲田 4-0         | "               |              |     |     |                             |
| 10.24 | B・B   | Y.C.& A.C. 13-3 | 学習院             |              |     |     |                             |
| 11.4  | R・F   | 12-0            | Y.C.& A.C.      | 初勝利          |     |     |                             |
| 11.5  |       | 慶応 3-3          |                 |              |     |     |                             |
|       |       | 0-22            |                 |              |     |     |                             |
| 11.5  | H     | Y.C.& A.C. 5-0  | 慶応              |              |     |     |                             |
| 1.23  | R・F   | " 19-0          | 慶応              |              |     |     |                             |
| 2.13  |       | " 30-0          |                 |              |     |     |                             |
| 2.20  |       | " 16-0          |                 |              |     |     |                             |

| 年     | 月日           | 種目   | 記                        | 事           | 備考  |
|-------|--------------|------|--------------------------|-------------|-----|
| 1909  | 1.30         | H    | Y.C. & A.C. 2-0          | 慶応          | 初勝利 |
|       | 2.21         | H    | " 4-3<br>2-0             | "           |     |
|       | 2.11         | A・F  | " 3-1                    | 高師          |     |
|       | 6.26         | B・B  | 慶応 10-3                  | Y.C. & A.C. |     |
|       | 7.31         | B・B  | Y.C. & A.C. 8-2          | オール横浜       |     |
|       | 8.14<br>9.11 | B・B  | 早稲田 8-2<br>15-2          | Y.C. & A.C. |     |
|       | 10.3<br>10.9 | B・B  | オール横浜 10-1<br>6-0        | "           |     |
|       | 10.16        | B・B  | 早稲田 13-2                 | "           |     |
|       | 12.18        | R・F  | 慶応 4-0                   | "           |     |
|       | 1910         | 1.22 | H                        | " 1-0       |     |
| 2.5   |              | R・F  | Y.C. & A.C. 19-0<br>28-0 | 慶応          |     |
| 3.5   |              | H    | 慶応 2-1                   | Y.C. & A.C. |     |
| 11.19 |              | R・F  | " 4-3                    | "           |     |
| 11.26 |              | R・F  | Y.C. & A.C. 16-0         | 慶応          |     |
| 1911  | 2.18         | R・F  | " 21-0                   | "           |     |
|       | 11.25        | R・F  | " 0-0                    | "           |     |
| 1912  | 2.10         | R・F  | 慶応 5-0<br>7-0            | Y.C. & A.C. |     |
|       | 2.17         | H    | " 2-2                    | "           |     |
|       | 11.16        | R・F  | Y.C. & A.C. 13-0<br>15-0 | 慶応          |     |
|       | 11.30        | R・F  | " 0-0<br>0-8             | "           |     |

上級学校の課外のスポーツとして広がってゆく。東京大学、同予備門、高等商業、高等師範などで行なわれたのがそれである。このような日本側の学校スポーツの抬頭の動きを背景にして、学生による外人スポーツ・クラブとの交流が、陸上競技と漕艇ではじまる。この交流は外人側が帝大の春の競漕会、秋の陸上運動会に招かれ、帝大学生がY.A.R.C.のレガッタや、Y.C. & A.C.の競技会に招待されるという形をとっている。高商、一高が一回ずつレガッタに招かれているが、それ以外はすべて帝大が相手となっている。この橋渡しの役は、F.W.ストレンジであった。

陸上競技の場合は、どちらが招かれても対抗競技ではなく、招待レースであった。漕艇のほうは、記録の残っている11例(海軍レガッタを除く)のうち4例が、日本人対Y.A.R.C.の対抗レースの形をとっている。陸上競技は1892年以降、漕艇は1897年以降交流の記録を発見できなかった。

この兩種目に続いて、野球、水泳、自転車が登場してくる。野球は最初は専ら第一高等学校と、Y.C. & A.C.との試合である。一高は周知のように、1890年頃から東京の野球界を牛耳っていたチームであって、早くからY.C. & A.C.との試合を望んでいた。1896年5月に外人教師メーソンの斡旋で実現したのである。野球に関して注目すべきことは、1890~94年にかけて、Shirasu という人物がY.C. & A.C.の野球試合に個人的に加わっていることである。この人物は、当時野球で一高の好敵手であった明治学院学生の白洲長平であって、同学院教師アメリカ人マクネア(McNair)のコーチをうけ、その誘いで彼と共に同クラブの試合に参加したと思われる。白洲は捕手や遊撃手をつとめ、J.W.M.紙上では smart Japanese などといわれ好評をえているので、かなりの名手であったようである。野球ではこののち、表にあるように、諸学校のチームもこれに加わり活況を呈

し、明治期には最も交流の頻繁な種目となる。1907年には横浜商業、学習院、早稲田に Y.C. & A.C. を加えて京浜野球リーグを結成するほどであったが、このリーグはこの年限りであった。明治末年近くなると、アメリカの大学チームと日本チームとの交流試合が盛んとなり、これにつれて、Y.C. & A.C. との交流は下火となってゆく。

水泳に関して Y. A. R. C. の夏季の水泳競技会についてはすでに述べた。ところで、1896、7年のこの大会の水球に、坂本という日本人が出演している。坂本は当時横浜にあったイギリス人系のヴィクトリア・パブリック・スクール<sup>(注1)</sup>の生徒であったらしく、1892年の陸上競技にも顔を出している。慶応や一高で水球をはじめのは明治40年過ぎであるので、この例は非常に早い時期になるわけである。しかしこの坂本がその後日本のスポーツに関係したかどうかはわからない。1898、99年の夏には有名な水府流太田派遊泳場の泳者と Y. A. R. C. 会員との間の競泳がある。2回とも100、440、880ヤードの3種目の競泳が行なわれ、短い方の2種目を日本人がとって勝っている。この種の記録も、その後は見られない。

1897年(明治30年)前後は、既述のように自転車ブームであった。1898年11月4日に上野不忍池畔で内外連合自転車競走運動会が開かれ、外人や子供を含む500余名が自転車で繰り込んで、朝11時半から夕方6時までレースを行なったということである。<sup>6)</sup> Nippon Bicycle Club はその前年に設立され、既述のように、大日本 Sorin クラブと姉妹クラブになり、しばしば合同でレースを行なったのである。上記の出来事の前年1897年11月3日には、N. B. C. メンバー42人が東京に出て、Sorin クラブ会員と共に総勢100人余りで車を連ねて、新橋—上野—浅草—向島のコースを走り、上野で親睦会を催したという記録がある。<sup>7)</sup> このように N. B. C. もブームの一翼をになったと思われる。しかしこのような活動もブームに乗った一現象に過ぎなかったためか、あるいはニュース・ソースとして価値が下がったためか、1905年以降は J. W. M. の記事から消えてしまう。

1901年以降になると、ラグビー、サッカー、ホッケーなどイギリス育ちのボールゲームでの交流

がはじまる。これら3種目の交流には、いくつかの共通点がある。すなわち、まず日本のある学校にチームが誕生し、Y.C. & A.C. に試合を申し込んでいること、そしてしばらくは、日本人の間には他にその種目を行なうものがないくて、横浜、神戸の外人やイギリスの軍人のチームのみがその相手であったこと。また最初は彼我の実力がかなり隔たっていて、Y.C. & A.C. が日本チームの到達目標となっていたことなどである。

ラグビーは慶応義塾で1899年、英文教授 E. B. クラーク (Clarke) と田中銀之助の指導のもとにはじまり、1901年12月9日に Y.C. & A.C. との初試合を行なっている。他の日本チームが生まれこれと試合を行なうのは、1911年4月であり、第三高等学校がその相手であった。この間に慶応は Y.C. & A.C. と23試合を行なっている。(他に神戸外人チームと2試合) はじめて Y.C. & A.C. に勝ったのは8年、12試合目の1908年11月である。

サッカーが東京高等師範学校で組織化されたのは、1896年同校々友会フットボール部が最初であった。Y.C. & A.C. との初試合は1904年2月である。サッカーの場合は日本人チームが他に生まれたのは比較的早く、1906年に高師と東京府師範との間で試合が行なわれている。高師が初めて Y.C. & A.C. に勝つのは、5年、6試合目の1908年1月である。<sup>(注2)</sup>

ホッケーはやはり慶応義塾で1906年11月、アイルランド人牧師 W. T. グレー (Grey) の指導ではじまり、翌1907年1月に Y.C. & A.C. と初試合を行なっている。初勝利は4年目、10試合目の1910年1月である。ホッケーの場合は他の日本人チームの誕生がおそく、16年後の1922年までまたねばならなかった。<sup>(注3)</sup>

この3種目の中でラグビーが Y.C. & A.C. との試合回数も多く人脈的にもつながりが強かったと思われる。というのは、E. B. クラークは横浜生れでヴィクトリア・パブリック・スクール→ケンブリッジ大学のコースを経ており、Y.C. & A.C. の会員であった。田中も同様のコースを経ていて、同クラブと親しかつたらしく、1900年12月の同クラブのラグビー試合に田中の名が見えるのである。

テニスでは、日本で早い時期に軟式テニスが考案され、そちらへ大勢が進んだためか、野球とやらんで学生のスポーツとして盛んであったにもかかわらず、外人との試合は殆んど見られない。この辺は明治30年以降の漕艇と事情が似ている。学校との試合としては、わずかに1905年の横浜商業とY.C. & A.C.との1例のみである。ただ1900年に設立された東京ローンテニス・クラブが内外人の混合したクラブであって、このクラブとY.C. & A.C.との試合で東京側から朝吹、山崎、松方らの日本人が出場しているのが見られる。

ゴルフ、ヨットに関しては、明治期には、交流の例は見出せなかった。N.R.C. ゴルフ・クラブは、大正に入ってから誕生する駒沢の東京ゴルフ・クラブに、ゴルフ場設計などの面で影響を与えることになる。<sup>8)</sup> またヨットにおいても、湘南の海に日本人のヨットが浮かぶのは大正に入ってからである。<sup>9)</sup>

最後に珍しい例として、クリケットにおいて、1905年7月に、日本人が試合に参加しているのが、ただ1例だけ発見された。これは、東京外人対Y.C. & A.C.のクリケットの試合で、東京からマツカタとヤマサカ(キの間違いか、一筆者注)という人物が出場しているのである。これらの人物は、上記の東京ローンテニス・クラブのメンバーかもしれない。クリケットは明治初期には、野球、ボート、テニスなどと共に、日本各所で伝来される機会を持ったスポーツであったはずであるが、遂に日本人に選択されなかったスポーツである。

以上の交流において、全期を通じて最も多くこれに関与している外人スポーツ・クラブは、Y.C. & A.C.であり、Y.A.R.C.がこれに次いでいる。他は例数とか、期間とかの面でこの両者に及ばないのである。「見せるスポーツ」として繁栄した競馬のN.R.C.は別として、日本のスポーツに影響を及ぼす可能性をもったクラブの名を挙げるとすれば、当然上記の2クラブを挙げるべきであろう。

種目としては、陸上競技、漕艇、野球、ラグビー、サッカー、ホッケーなど後に学生スポーツの中心となった競技的なスポーツに例数が多い。

また年代別の傾向としては、明治初年から10年代なかばまでは、軍人を中心にして射撃、カッターレース、これ以降は学生が中心となり、同10年代末頃から20年代には帝大学生を中心として漕艇、陸上競技、30年前後には水泳、自転車、同じ時期から野球がずっと続き、同30年代なかばからラグビー、サッカー、さらにホッケーが加わるというように概括することができよう。

## (2) スポーツ交流の影響

これまで見て来たスポーツ交流が、日本におけるスポーツの展開にどうかかわってくるかを考えてみたい。

初期の軍人による交流は、後年の日本のスポーツとは直接のつながりを持たないので、これを除いて、まず明治10年代から20年代にかけての陸上競技、漕艇の場合を考えてみよう。既述のように、この時期は学生スポーツの黎明期であって、帝大をはじめ諸学校でスポーツ組織が創立され、陸上運動会やボートレースが恒例の行事として制度化されつつあった頃である。それだけにY.C. & A.C. やY.A.R.C.の競技会が、その模範として絶好の行事であったであろうことは想像に難くない。帝大運動会の指導者ストレンジが積極的に帝大生と外人クラブの仲介をした意図も一つはここにあったのであろう。外人側でも知育に偏りがちな日本の教育にスポーツを持ちこんだ彼の事業を評価し、後援していたようである。J.W.M.が帝大の運動会の記事を再三にわたって記録、経過説明入りで報じ、必ずストレンジの努力を賞讃しているのはそのあらわれであろう。<sup>10)</sup> それだけに、この時期の交流は日本のスポーツに啓蒙的な役割を果たしたと言えよう。というのは技術的な面もさることながら、この時期に育ったアスリートやオアズメンには、後年日本のスポーツ界のリーダーとなった人物がいたのである。岸清一や武田千代三郎<sup>(注4)</sup>は代表的な人物で、武田は1885、88両年のボートレースと、87年の陸上競技会とで外人クラブの行事に参加している。彼は後年著書「理論実験競技運動」の中で、欧米人が老幼を問わず、いかにスポーツを熱心に行なうかという点について、Y.C. & A.C.の手入れの行き届いた

表 6-1 明治期の陸上競技記録の比較  
最高記録の比較

|          | 帝 大<br>(1899マデ) | Y. C. & A. C.<br>(1901マデ) | イ ギ リ ス<br>(1899マデ)  | ア メ リ カ<br>(1899マデ)   |
|----------|-----------------|---------------------------|----------------------|-----------------------|
| 100 ヤード走 | 10.4秒           | 10.5                      | 10.0                 | 9.8                   |
| ½ マイル走   | 2分16秒4          | 2.09.0                    | 1.54.6               | 1.53.4                |
| 1 マイル走   | ナ シ             | 4分45秒0                    | 4.17.0               | 4.15.6                |
| 走 高 跳    | 5フィート 9インチ      | 5-06- $\frac{7}{8}$       | 6-04- $\frac{1}{2}$  | 6-05- $\frac{5}{8}$   |
| 走 幅 跳    | 17フィート 6インチ     | 20-09 $\frac{3}{4}$       | 23-06- $\frac{1}{2}$ | 23-06- $\frac{1}{2}$  |
| 棒 高 跳    | 9フィート11インチ      | 9-00                      | —                    | 11-05- $\frac{3}{8}$  |
| 砲 丸 投    | 32フィート 4インチ※    | 36-07                     | 46-05- $\frac{1}{2}$ | 47-00                 |
| ハンマー投    | 99フィート10インチ※※   | 88-04                     | 134-07               | 145-00- $\frac{3}{4}$ |

※12ポンド ※※重量不明(帝大のみ)

表 6-2 明治20年(1887)の記録の比較

|          | 帝 大 運 動 会                      | Y. C. & A. C. 競 技 会 |
|----------|--------------------------------|---------------------|
| 100 ヤード走 | 11.8秒                          | 10.5(5ヤードハンディ)      |
| 440 ヤード走 | 63.2"                          | 53.0(20ヤードハンディ)     |
| 走 高 跳    | 4フィート 7インチ                     | 4-11                |
| 走 幅 跳    | 16フィート 8インチ $\frac{1}{2}$      | 18-00 $\frac{1}{2}$ |
| クリケット投   | 79ヤード 1フィート4 $\frac{1}{2}$ インチ | 93-2-2              |
| 砲 丸 投    | 31フィート03インチ※                   | 29-03               |

※14 $\frac{1}{2}$ ポンド

帝大の記録は陸上競技史(上)山本邦夫著より

Y. C. & A. C. の記録は J. W. M. 1902年4月5日, 1887年11月19日より

イギリス, アメリカの記録は Encyclopaedia of Sport より

グラウンドの例をひいて説明し、日本でも将来このようにスポーツを広めねばならぬと説いている。<sup>11)</sup> 高等商業の場合でも同校の漕艇は Y. C. & A. C. のサラベル (Salabelle, フランス人といわれている) にコーチをうけており、その紹介で1889年の Y. A. R. C. レガッタに出て、対抗レースを行なっている。この時には惨敗したのであるが、J. W. M. 評では、高商はサラベルのコーチをうけ隅田川ではよいフォームで漕いでいたのだが、Y. A. R. C. のクルーには敵わなかったとしている。<sup>12)</sup> この当時は対抗レースをする日本の学生側でも外人とのレースは不馴れな滑席艇を漕ぐことではあるし、負けても不思議はないという程度に考えていたようである。<sup>13)</sup>

しかしこの時期の交流は、兩種目において、日本側と外人クラブとの定期的対抗競技にまで発展することはなかった。これにはそれなりの理由が

あろう。陸上競技においては、まず第一には、彼我の能力の差があげられよう。特に明治20年頃には、表6のように記録を比較してみるとかなり差がある。また30年代になると、さしてレベルの高くなかった Y. C. & A. C. の記録に対して、7種目中3種目は凌駕するようになるが、長距離、投擲、走幅跳では及ばないのである。第2の理由は陸上競技の場合にはボートと違って日頃のトレーニングなしで会当日のみ競技をするという当時の傾向であったため日常活動としては不振であったのであろう。帝大の運動会が方針の転換をするのは明治31(1898)年以降である。<sup>14)</sup> 第3に Y. C. & A. C. の側にも問題があって、このクラブの競技会では既述のように一貫してハンディキャップ制をとり続け、インターボート競技でも1877年以降陸上競技を行なっていない。これらを考えると、Y. C. & A. C. にもボートやクリケットなみ

に対外競技を行なおうとする組織や意欲がなかったと見てよからう。

漕艇の場合には、既述のように11例中4例が彼我の対抗レースである。年代順にならべると、1885年帝大、89年高商、95年帝大、97年一高となる。このうち95年を除いては全部日本では用いていなかった滑席艇（舵手付フォア）を用い、95年のみ日本人が漕ぎ馴れていた固定席艇であった。勝敗は、それぞれ馴れた艇を漕いだ場合に勝ち、外人の3勝1敗となっている。このように使用していたボートの質的な違いが、漕艇の場合彼我対抗競技実施の障害となったと思われる。何故なら、負けても当然としていた85、89年のレースは別として、95、97年の両回は明らかに日本側にも勝つ意欲があり、その後も対抗レースを継続する意志をも見せているからである。特に97年の一高の場合には、前年に同校野球部がY.C. & A.C.に勝ち名声を博した後でもあり、かなり気負いがあったようである。当時のクルーの一人の報告によると、Y.C. & A.C.のレガッタに招待されたのであるから、彼らの主張を容れて平素練習していない滑席艇レースを承諾した。そのうえ、あらかじめ不利なコースを割当てられ、しかも相手有利のタイミングでスタート合図があったと、種々敗因をあげ、最後に「只々須らく外人は勝負に勝を制せん為めには凡ての手段を取りて自から恥とせざることを忘ること忽れ」と結んでいる。<sup>15)</sup>

このように見ると、漕艇では対抗レースをする意志は両者にあったが、彼我のボートの違いが障害となっていたと見るべきであろう。当時日本では滑席艇は建造されておらず、中学から社会人クルーまで固定席艇でレースを行っていた。彼らにとって、アウトリガーの滑席艇などは高嶺の花であったし、また日本人同士のレースの方が大切だったのである。

以上のようにこの時期の交流は、対抗競技によって競技力が向上するとか、人気が高まるというような効果をうみ出したとは思われない。やはり、日本の学生達のスポーツに対する認識を高めるという役割にとどまったと考えられるのではなからうか。

次の野球、水泳になると上記とは事情が異な

る。両種目の場合とも系譜こそ違え、日本側にある程度技術的な蓄積やしつかりした組織があり、初めから対抗競技という形で行なわれ、しかも互角以上の戦績を残しているのである。

しかもこの時期の交流の影響は、直接競技に参加した当事者への影響よりも、むしろ日本人が欧米人に勝ったという結果が、日本の一般の人々に与えた影響（即ち、結果としてその種目の人気の上昇→普及となる）のほうがより大きかったようである。特に野球の場合は、第一高等学校の生徒というエリート中のエリートが当事者であっただけに、明治30年代の諸学校における野球ブームをまきおこす一因となったのであり、ひいては日本における野球の地位を決定したとも言えるのである。それは、アメリカから伝来した Baseball が日本に普及したのではなく、むしろこれに「野球」という訳語を施した一高の野球が全国に普及したと表現した方がより適切であると言えるほどである。すなわち、一高生中馬庚(1896年Y.C. & A.C.を破った際の一高のコーチ、当時帝大学生)の考案した訳語「野球」は明治27年に造語されたものであるが、これがY.C. & A.C.との試合後数年間で全国的に「ベースボール」に代って使用されるにいたるのである。<sup>(注5)</sup> 明治30年代の京浜地区の野球界では、Y.C. & A.C.は登竜門的な存在であって、これを破ることが一流チームの必須条件として諸学校のチームが挑戦を試みていたのである。しかしY.C. & A.C.の実力は先の陸上競技の場合と大差のないものであったろう。1896年の一高との試合後のJ.W.M.の評には、一高の選手は若くて、よく練習をつみスマートで守備が正確である。しかしY.C. & A.C.の側は平素練習をせず、そろってプレーをする機会が試合の時だけであるので、勝てないのが当然であると至極公平冷静な見方をしている。<sup>16)</sup> 但し「イムブリー事件」以来、外人には警戒されていた一高応援団の猛烈さと、選手の乱暴なプレーには時々悩まされたらしく、ungentlemanlyな応援団の態度があったとか、<sup>17)</sup> unsportsmanlikeな選手の行為があったとか非難している記事も見える。<sup>18)</sup>

横浜外人との試合は、一高側が言うように、もちろん用具とか技術の改良をもたらしたのである。

う。<sup>19)</sup>しかし日清戦争直後という近代日本でもナショナルリズムが最も昂揚した時機に、西洋人のスポーツで日本人が西洋人に大勝したという事実ももたらした社会的な影響は、それ以上に大きかったと考えられるのである。

水泳の場合は、大川端の水府流太田派の水練場の泳者が、Y.C. & A.C. の泳者を破ったのであるが、水連40年史によると、この競泳の結果、日本人は競泳という形の水泳のあり方を知り、全国的に競泳が水泳行事の一環として行なわれるようになったこと、また翌年東京で各流派連合の競泳大会が行なわれたことなどをあげ、これが競泳の流行の原因となったことを指摘している。<sup>20)</sup>水泳の場合は、技術的な収獲はなかったようである。

この兩種目における Y.C. & A.C. や Y.A.R.C. の役割は、いわば明治日本に対する欧米先進諸国の関係のスポーツ版のようなものであって、「追付き、追越さるべき目標」であり、仮想敵に他ならなかった。

20世紀以降に展開するラグビー、サッカー、ホッケーの交流における Y.C. & A.C. の役割は、まさに温床という表現がふさわしい。表5で見る通り最初の試合は、3種目とも大差がついている。ラグビーは32～5でしかもこの5点は慶応側でプレーをした E. B. クラークの得点であった。サッカーは9～0 (Y.C. & A.C. 側の記録では10～0となっている)、ホッケーは6～0である。この時の外人側の日本チーム観を見ると、ラグビーに関する J. W. M. 評はクラークや田中の優れた指導で理論は比較的よくわかっているようだし、タックルも器用だし、スクラムからのヒールアウトも非常によいが、何分ラグビーで大変重要なスピードと重量ではるかに外人に及ばない。<sup>21)</sup>それで結局は一方的な試合になってしまったといっている。高師のサッカーに関しては、Y.C. & A.C. の報告では、「彼等(高師の選手達)のプレーは非常に高い水準ではなかった、そこでクラブとしてはむしろ弱いチームを出したのだが、それでも10～0であっさりと敵を征服した。……」とある。<sup>22)</sup>一方、日本側の記録を見ると、高等師範の校友会誌に次のような一文がある。「…(前略)…ただ漫然と何の目的となく面白半分に球を蹴りて能く能

事終はれりとなすものにあらず。茲に於てか吾人は大いに考へ、而して終に大勇猛心を鼓して一大事を画しぬ。曰く、方今我が邦に於て此の技の牛耳を取れるもの横浜アマチュア・クラブを措きて他に求むべからず。勝敗の数を度外に置き、強敵に対して実地戦闘の術を究めずんばフットボールの事遂に語るに足らず。竜車に向かふ蟻螂の斧なりと笑ふものあらば恣にそが譏笑に一任せん。勝たば隆々の名を博し敗るも恥にあらず。…」<sup>23)</sup>と研究・向上心と功名心の錯綜した心理をよく表わしている。そして試合後には、「抑も今回の戦ひに臨むに至り吾人の私に恃みとせしところのものは、日本人特有の敏捷にして戦略の如きも彼れに譲るなきを信じたれど、ただ彼れが天然の怪速力と蹴り方の巧妙なるとには、一籌を輸すべきを予期せしが、実際は予想の上において、彼れの戦略は吾人の意外の血に出で、正兵奇兵並び用ひて、容易に向隙の乗ずべきを見ず。…」<sup>24)</sup>となる。すなわち、何もかも及ばないことをさとしたのである。そしてこの対抗試合を永く継続しようと言っている。ラグビー、ホッケーにおいても類似の意図が働いていたであろうことは想像に難くない。そして、年々 Y.C. & A.C. と定期的に試合を重ねて行くのである。ラグビーの試合が始まって、まる4年を経た1905年12月、11～0で敗れた試合後の慶応義塾学報に次のような一文がある。「但し万般に於て非常に進歩を示せるより見れば、義塾方敗れたりとは云へ捲土重来の日何れ遠きにあらざるべし……」<sup>25)</sup>

このように、これら3種目においては日本の唯一つのチームが専ら Y.C. & A.C. を試合の相手として、戦いながら学ぶという関係を保って行ったのであり、しかもこれらのチームが当該の種目で草分けとして、やがて誕生するそれぞれの組織の中心となったわけであるから、Y.C. & A.C. はこれら3種目にとっては、温床としての役割を果たしたと言えるであろう。これがこの時期の交流の意味である。

以上のように、横浜外人スポーツ・クラブは日本人とのスポーツの交流を通して、時期やスポーツの種目によって意味は異なるが、日本におけるスポーツの発達に深いかかわりを持ってきたと考

えられる。しかし忘れてはならないことは、このように外人クラブと日本人のスポーツとを結びつけるには両方にまたがった人物の存在が不可欠であることである。外人スポーツ・クラブは居留民達が彼らのスポーツ活動を目的として設立したものであるから、日本人に対するスポーツの伝来とか普及に積極的であったわけではない。しかし特定のクラブ員が、たまたま日本人へのスポーツの伝来者となることはあったのであって、このような人物が双方を結ぶ絆となったのである。今それらを挙げて見ると、帝大におけるF.W.ストレンジ、高商におけるサラベル、明治学院のT.M.マクネア、慶応義塾のE.B.クラークおよびW.T.グレイなどである。このうち、最後のグレイはクラブ員であったかどうかはさだかでない。しかし同塾とY.C. & A.C.との試合の時、彼はY.C. & A.C.側に加わって試合を行なっているため、クラブ員である公算は大きい。

#### 引用文献

- 1) 岸野雄三編：近代体育スポーツ年表，1973，大修館，109頁。ほか日本側史料は一致している。
- 2) IIの(5)と同じ
- 3) Williams, H. S.: K. R. & A. C. 1870~1970 前掲 p. 8
- 4) 今村嘉雄：日本体育史，1970，不昧堂 410~416頁
- 5) 第一高等学校寄宿寮編：向稜誌，1913，311頁
- 6) 木下秀明：前掲書62頁
- 7) J. W. M.: Nov. 6th 1897
- 8) 東京ゴルフ倶楽部編：東京ゴルフ倶楽部50年史，1966，2頁
- 9) 東俊郎編：スポーツ80年史，1958，日本体育協会，337頁
- 10) J. W. M.: Jun. 16th 1883, Jun. 13th 1885, Jun. 5th 1886
- 11) 武田千代三郎：理論実験競技運動，1904，博文館，177頁
- 12) J. W. M.: Jun. 22th 1889
- 13) 久保勘三郎編：東京帝国大学漕艇部50年史，1936，東京帝国大学漕艇部 405頁
- 14) 木下秀明：前掲書 130頁
- 15) 森保斐：横浜外人対端艇競漕記，第一高等学校校友会雑誌67号，1897年5月，86~91頁
- 16) J. W. M.: Jun. 13th 1896
- 17) J. W. M.: Jun. 9th 1900
- 18) J. W. M.: Jun. 1st 1901
- 19) 向稜誌 前掲 319~320頁
- 20) 日本水泳連盟：水連40年史，1969，10~11頁
- 21) J. W. M.: Dec. 7th 1901
- 22) J. W. M.: Mar. 5th 1904

- 23) 東京教育大学サッカー部編：東京教育大学サッカー部史，1974，47頁
- 24) 同上書 50頁
- 25) 慶応義塾学報第99号 1906年1月

#### 注

- (注1) この学校は1887年ヴィクトリア女王即位50周年記念に横浜在住のイギリス人達が募金して子弟の教育機関として設立したものである。イギリス人ばかりでなく、日本人の子弟も通学していたという。(手塚竜彦：英学史の周辺，149頁より)
- (注2) この試合のことも、J. W. M.には掲載されていない。東京教育大学サッカー部史所収の高等師範校校友会誌第15号明治41年3月の蹴球部報告によれば、第5表のように、1月25日、2月1日と2連勝している。高師の運動場で行なっているため記事にしなかったのであろうか。
- (注3) この年になってやっと陸軍戸山学校、次いで明治大学、早稲田大学、日本歯科大学がチームを組織し、翌年に大日本ホッケー協会が設立された。
- (注4) 武田千代三郎(1867~1932)1882年に東京大学予備門へ入学し、90年6月帝国大学法科を卒業、長く官界にあり、秋田、山口、山梨、青森の各県知事を歴任、晩年は神宮皇学館長、大阪高商校長を勤めた。予備門時代からストレンジにスポーツの指導をうけ、彼のもっとも忠実な祖述者で、しばしば彼の思い出を書いている。学生時代の同僚岸清一(体協会長)とともに初期スポーツ界のリーダーであり、大日本体育協会副会長をも勤めている。彼の著「理論実験競技運動」は、明治期を通じて科学的スポーツ論の白眉とされている。
- (注5) この点に関しては、伊東明「明治時代における新聞記事について」第26回日本体育学会大会発表、1975年9月、によると、明治36年以降「ベース・ボール」という言葉を用いている新聞は中央・地方を問わず非常に少なく、「野球」という言葉が定着したとしている。

#### むすび

本研究の具体的な目標は、

1. 明治期の横浜における外国人スポーツ・クラブの実態と推移とを明らかにすること。
  2. それらのクラブが、スポーツにおいて日本人とどのような交流を持ち、またそのような交流が日本におけるスポーツの発達にどのようなかかわりを持つか。
- を考察することであった。
- 1.については、表1でクラブの存在状態を明らかにし、つづいてこれら諸クラブの会員数、会計規模、活動内容の実態とその推移とを見た。そし

て、これらの中で「自から行なうスポーツ」のクラブとしては Y. C. & A. C. と Y. A. R. C. が有力クラブの双璧であることが明らかとなった。

2. の第1点に関しては、表5で交流の時、種目、彼我の団体・個人などを明らかにし、明治初期～10年代半ばまでは日本側は軍人が中心となって射撃・レガッタ、その後学生が中心となって、同10年代末から同20年代には陸上競技と漕艇、同20年代末からは野球、同30年前後には水泳、自転車、同34年代以降ラグビー、サッカー、ホッケーが順次加わるというおおよその傾向を示した。最後に2. の第2点については、陸上競技、漕艇の時期の交流は啓蒙的な役割を果し、野球、水泳の時期には競技の結果が、その種目の一般への普及の引き金の役割を果し、ラグビー以下3種目の場合には、クラブがその種目の核を育て上げる温床的な役割を果しているとした。

さらに概括すれば、明治期の横浜外国人スポーツ・クラブは日本におけるスポーツの発達に関して、特定の部門においては、かなり積極的な役割を果したと言えよう。そして特定部門というのは、後に日本の「行なうスポーツ」の主流となる学生を中心とする競技スポーツの部門であった。

しかし本研究においては、スポーツとしては重要な一部門である競馬にまで手を伸ばすことができなかつたし、また自転車についても深く追究することができなかつた。この点は今後の問題としたい。

日本における欧米スポーツの伝来と発達という観点から見ると、外国人スポーツ・クラブの存在は以上のように受容者側にとって、いくつかの種目に関し有利な条件であったと言えよう。しかしこれはあくまで外的な条件にすぎないのであって、当然ながら受容者である日本人側の主体的な条件がより重要であることは言うまでもない。外人のヨット・クラブがあったからといっても、それが直ちに日本人がヨットを行なうことにはならなかつたし、漕艇における滑席艇の普及や、テニスにおける硬式への転向も大正期に入ってからであつて、固定席艇が全国的に用いられたことや、軟式テニスの発達は日本の独自の条件から生まれ

たことである。

横浜外人のスポーツ活動の中で、明治期に最も多く行なわれ、関心の高かつたものは、Y. C. & A. C. の表看板のクリケットであつた。したがって日本人にとってみれば、この種目は外的な条件としてはむしろ有利なはずであるが、前にも述べたように何故か日本人はこれを選択しなかつた。明治初期から英人教師がクリケットを教えたという記録は、米沢英学校、開成学校、工部大学校などにみられる。しかし、本研究で見た範囲では、その痕跡は殆んど見出せなかつた。明治30年以降、野球が日本人の間で盛んになるにつれて、イギリス人系の J. W. M. では、「何故日本人は野球ばかりを行なつて、クリケットを行なわなひか。」とか、「将来は野球と同じようにクリケットでも遠征チームを作り、イギリスやオーストラリアへ送らんことを望む。」といった記事が散見されるが、遂にそのようにはならなかつた。

この点は、イギリス人の間ではメジャー中のメジャー・スポーツであつたクリケットというスポーツのもつ特殊な性格の問題として、また日本人の選択の問題として興味のあるところである。

本研究は、昭和48年度文部省科学研究費（一般D）の助成をうけて行なつた研究成果の一部である。

#### 参考文献

1. 東俊郎編：スポーツ80年史，日本体育協会，1958年
2. 朝野新聞
3. 第一高等学校寄宿寮編：向稜誌，1913年
4. 第一高等学校校友会雑誌
5. 蛭原八郎：日本欧字新聞雑誌史，1934年
6. 学習院編：学習院史，1928年
7. 広瀬謙三編：日本の野球発達史，都政合同通信社，1959年
8. 一橋大学一橋会端艇部史編纂委員会：一橋大学端艇部史資料集，1957年
9. 神奈川県企画調査部県史編纂室：神奈川県史資料編15近現代5，1973年
10. 神奈川県教育委員会編：神奈川県体育史，1973年
11. 神奈川県立図書館編：神奈川県史料第7巻，外務部2，1971年
12. 慶応義塾編：慶応義塾百年史，1958～69年
13. 慶応義塾学報，1901～12年
14. 慶応義塾体育会誌
15. 慶応義塾体育会雑誌
16. 君島一郎：日本野球創世記，ベースボール・マガジン社，1973年

17. 木村毅：日本スポーツ文化史，洋々社，1956年
18. 木下秀明：スポーツの近代日本史，杏林書院，1972年
19. 岸野雄三編：近代体育スポーツ年表，1973年
20. 久保勘三郎編：東京帝国大学漕艇部五十年史，1936年
21. 京都大学文学部国史研究室編：日本近代史辞典
22. 三村隆敏編：神戸ゴルフ倶楽部史，神戸ゴルフ倶楽部，1965年
23. 武藤富男：明治学院九十年史，1967年
24. 日本中央競馬会編：日本競馬史，1966年
25. 日本の英学100年編集部編：日本の英学100年，明治編・別巻，研究社，1968・69年
26. 日本水泳連盟：水連40年史，1969年
27. 日本体育協会監修：現代スポーツ百科事典，大修館，1970年
28. 西村貫一：日本のゴルフ史，文友堂，1930年
29. 大谷，野口，宮畑，本間，今村編：増補體育大辞典，不昧堂，1966年
30. 世界大百科事典，平凡社，1970年版
31. 高谷道男：ヘボン，吉川弘文館，1968年
32. 武田千代三郎：理論実験競技運動，博文館，1904年
33. 手塚竜磨：英学史の周辺，吾妻書房，1968年
34. 東京ゴルフ倶楽部編：東京ゴルフ倶楽部50年史，1966年
35. 東京教育大学サッカー部編：東京教育大学サッカー部史，1974年
36. 東京日々新聞
37. ユネスコ東アジア文化研究センター編：資料御雇外国人，小学館，1975年
38. 山本邦夫：陸上競技史，道和書院，1974年
39. 横浜毎日新聞
40. 横浜市編：横浜市史二・三巻上下，資料編三
41. 横浜市役所編：横浜市史稿風俗篇，1932年
42. Black, J. R.: Young Japan, Trubners & Co., 1880, 邦訳ねず・まさし，小池晴子，平凡社，1970年
43. Japan Weekly Mail 1873~1912
44. McIntosh, P. C.,: Sport in Society, Watts & Co., 1963, 邦訳飯塚，石川，竹田，不昧堂 1970年
45. Menke, F. G. edi.: The Encyclopedia of Sports 4th Revised Edi., Barnes & Co. 1969
46. Peek, H. & Afalo, F. G.: The Encyclopaedia of Sport, The Knickerbocker Press, 1899
47. Satow, E. M.: A Diplomat in Japan, 1921 邦訳坂田精一：一外交官の見た明治維新，岩波文庫，1966年
48. Williams, H. S.: Kobe Regatta and Athletic Club 1870~1970 The First Hundred Years, Kobe Regatta and Athletic Club, 1970